



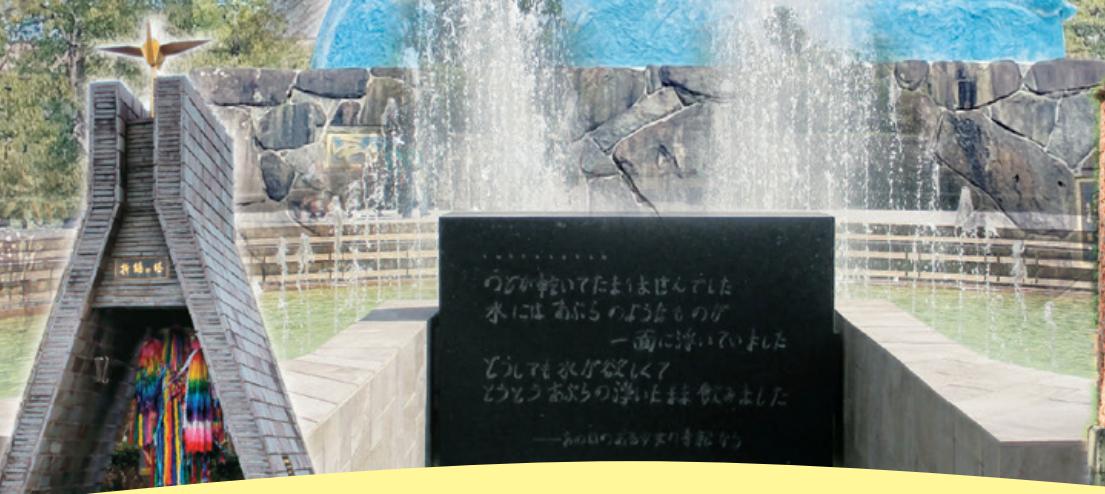
— 戦後80年記念事業 —
令和7年度 郡山市中学生長崎派遣事業



2025

ナガサキへのメッセージ

← 報告書 →



郡山市核兵器廃絶都市宣言

(昭和59年6月15日議決)

世界恒久平和実現のために、核兵器を廃絶することは、人類共通の願望である。

核兵器は人類と地球の命運を左右するにもかかわらず、新しい軍事技術の開発が続けられている。

わが国は、世界で唯一の核被爆国として、平和を愛するすべての国の人々とともに、人類の安全と生存のため不断の努力を続けるべきである。

郡山市は、日本国憲法の精神に基づいて、核兵器の完全廃絶と軍備縮小を全世界に訴え、人類の願いである世界平和の実現を希求し、核兵器廃絶都市であることを宣言する。



令和7年度 郡山市中学生長崎派遣事業 「2025 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市長 椎根 健雄

1945年8月、広島と長崎において人類史上初めて原子爆弾が投下され、一瞬にして数多くの尊い命が奪われ、両都市は壊滅的な被害を受けました。また、今なお多くの方々が、放射線等の影響による後遺症に苦しみ、人類に深い傷跡を残しております。本市におきましても、4度にわたる空襲により大きな被害を受け、500名を超える尊い命が犠牲となりました。

本年、あの悲惨な戦争の終結から80年という大きな節目を迎えました。終戦から長い歳月が経過し、戦争の記憶が風化しつつある中、私たちは当たり前のように平和を享受しております。

しかし、世界情勢に目を向けてみると、緊張の度合いは増しており、武力の行使や核の脅威が高まるなど、国際社会の平和と秩序が脅かされている今、私たちは平和について、改めて考えなければならない状況にあります。

今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれた、かけがえのないものであることを決して忘れてはなりません。

被爆者の平均年齢が86歳を超え、戦争や原子爆弾の恐ろしさを直接経験された方々が減少していく中で、昨年、日本原水爆被害者団体協議会様がノーベル平和賞を受賞されたことは、核兵器使用の悲惨さと廃絶を国際社会に訴える大きな機会となったところであります。

「核兵器廃絶都市」を宣言する本市といたしましても、「平和を考える市民の集い実行委員会」との共催により、1996年から次代を担う中学生の被爆地派遣事業を実施しており、今年も、市内各校の代表生徒に役員を加えた派遣団32名を長崎市へ派遣いたしました。

今年は、節目となる年であるため、派遣に先立ち、被爆クスノキを題材にした特別授業や郡山市歴史情報博物館の見学を通じて、それぞれの地域の歴史についての理解を深める機会を新たに設けました。

長崎では、原爆資料館や永井隆記念館、山王神社の被爆クスノキの見学、平和祈念式典への参列をはじめ、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話などを通して、戦争の悲惨さや原子爆弾による被害の恐ろしさ、命の大切さなど、たくさんのこと学んだことだと思います。

中学生の皆さんには、被爆地長崎での経験を人生の糧にしていただくとともに、4日間の研修を通して学んだことを家族や友人など多くの方々に話し、平和の大切さを伝えていただきたいと願っております。

この報告書には、参加された中学生28名が、平和の尊さや核兵器廃絶の必要性について学んだことや感じたことについて、それぞれの言葉でまとめられています。この報告書が一人でも多くの方々にご覧いただけることを願うとともに、平和について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

長崎市の皆様には、本市派遣団を今年も温かく迎え入れていただき、この場を借りて、改めて御礼を申し上げます。

結びに、本事業の実施に当たり多大なる御支援、御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝を申し上げまして、挨拶といたします。



令和7年度 郡山市中学生長崎派遣事業 「2025 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

平和を考える市民の集い実行委員会長 土屋 繁之

戦後80年という節目の年を迎えた本年度、感受性豊かな中学生28名を、被爆地長崎へ派遣し、無事に研修活動を実施することができました。これもひとえに中学生の皆さんをはじめ、御家族、学校関係者、その他多くの方々の御理解と御協力の賜物であり、平和を考える市民の集い実行委員会を代表して心より御礼申し上げます。

本事業は、未来を担う若い世代が被爆地を訪れ、平和の尊さや核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を認識してもらうことを目的として実施しております。特に本年度は、戦後80年記念事業として、事前学習の中で、長崎市の被爆樹木クスノキの再生の歩みを特別授業で学び、歴史情報博物館で本市に投下された模擬原爆に関する展示を見学するなど、それぞれの歴史について学ぶ機会を設けました。

長崎市での研修では、被爆者の方から直接証言を伺い、原爆資料館で悲惨な実相に触れ、平和祈念式典に参列し祈りを捧げるなど、多くの貴重な体験ができたことと思います。これらの体験を通じて、参加した中学生一人ひとりが「平和とは何か」を自らの心に問いかけ、平和の尊さを実感する機会となったものと考えます。

今日、被爆者の平均年齢は86歳を超え、その証言を直接伺う機会は年々限られてきております。そのような中で、現地で得た学びを自らの言葉で伝え広めることは、参加された中学生の皆さんに課せられた大切な使命であります。皆さんには、その使命を胸に、今後、平和の輪を広げていくメッセージとしての役割を担っていただきたいと思います。

核兵器による惨禍を二度と繰り返さないためには、一人ひとりが平和への想いを未来へと繋いでいくことが大切です。中学生の皆さんとの真剣な姿勢や言葉は、平和の尊さを改めて思い起こせるものであり、私たち大人にも大きな気づきを与えます。被爆地長崎での経験が今後の人生の礎となり、平和を築く力へと繋がっていくことを心から期待しております。

実行委員会といたしましても、本事業が単なる一度限りの体験にとどまることなく、参加者が学校や地域において発表や交流を重ね、平和のバトンを確実に受け継いでいけるよう、引き続き取組を推進してまいります。そして、この研修の成果が市民全体へと波及し、次代の平和を築く原動力となることを切に願っております。

結びにあたり、本事業の実施に際し、多大なる御尽力をいただきました関係各位、そして現地で貴重な体験の機会を提供してくださった長崎市の皆様に改めて御礼申し上げますとともに、恒久平和の実現に向けた確かな一歩となることを祈念し、挨拶いたします。



令和7年度 郡山市中学生長崎派遣事業 「2025 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市教育委員会教育長 早崎 保夫

市内の中学校・義務教育学校から選出された皆さんは、令和7年度郡山市中学生長崎派遣団員として、令和7年8月7日から4日間長崎市を訪問しました。長崎市長に「平和へのメッセージ」を伝える重要な役割を担った皆さんは、きっと平和の尊さや核兵器廃絶の必要性を強く認識されたことだと思います。

80年前の8月9日、原子爆弾の投下により、長崎の街は一瞬で焼け野原となり、多くの尊い命が奪われました。被爆された方々は、癒えることのない傷を負い、今もなお、後遺症や健康への強い不安に苦しみ続けています。さらに、戦後80年を迎え、被爆者の高齢化が進み、被爆体験の記憶を今後どう受け継いでいくのかが問われております。

そのような中、これから時代を担う皆さん、平和公園や原子爆弾落下中心地碑、原爆資料館を見学したこと、平和祈念式典や青少年ピースフォーラムに参加したことなど、長崎の地に実際に立ち、自らの目で確かめ、意見を交換した体験は、平和への思いを受け継ぐ意味で、とても意義深いことだと感じています。

この報告書は、長崎で様々なことを体験した皆さん、実際に感じ取ったことを、平和へのメッセージとしてまとめたものです。どのページを見ても、一人一人の平和への思いが、それぞれの言葉でつづられています。私は、参加した皆さん全員が、核兵器が及ぼす悲惨さや、平和の大切さに触れるとともに、「未来の平和」のために自分自身ができることに取り組んでいこうとする強い決意を述べていることに、大きな感動を覚えました。

皆さんには、この派遣事業を通して学んだことを多くの方々に語り伝えるとともに、平和で持続可能な社会の担い手として、健やかに成長されることを切に願っております。

結びに、所期の目的を達成され、立派な報告書を完成させた皆さんと、派遣に御尽力いただいた関係者の皆様をはじめ、御協力をいただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本市の中学生を温かく受け入れ、全世界に向けた長崎平和宣言の中で「被爆80年にあたり、長崎の使命として、世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に『長崎を最後の被爆地に』するために、地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていくことをここに宣言します。」というメッセージを発信された長崎市長をはじめ、長崎市の皆様の益々の御健勝と御発展を御祈念申し上げ、挨拶といたします。

目 次

【事業内容】

平和へのメッセージ	1
事業概要	3
派遣団名簿	5
研修行程	6

【研修風景】

集合写真	7
写真で綴る研修風景	8

【団員報告】

宍戸 蒼	(日和田中学校)	13
加藤 真琴	(行健中学校)	15
長谷川 慈	(明健中学校)	17
大和田 樹	(安積中学校)	19
田代珠々	(安積第二中学校)	21
斎藤格	(三穂田中学校)	23
古川朱音	(逢瀬中学校)	25
七海豪	(片平中学校)	27
本田結	(喜久田中学校)	29
牧園康太郎	(熱海中学校)	31
二瓶瑞基	(守山中学校)	33
遠藤望央	(高瀬中学校)	35
前澤勇羽	(郡山第一中学校)	37
根本瑛多	(郡山第二中学校)	39
堀川かなえ	(郡山第三中学校)	41
中原晴来	(郡山第四中学校)	43
藤田奏	(郡山第五中学校)	45
和田暖仁	(郡山第六中学校)	47
本間陽菜	(郡山第七中学校)	49
佐藤圭一郎	(緑ヶ丘中学校)	51
上野茉那	(富田中学校)	53
田村惺那	(大槻中学校)	55
前原虹	(小原田中学校)	57
熊田蘭	(宮城中学校)	59
横田夕乃帆	(御館中学校)	61
木村真緒	(郡山ザベリオ学園中学校)	63
村上正悟	(西田学園)	65
亀山愛心	(湖南小中学校)	67

§ 事 業 内 容 §

平和へのメッセージ

戦後80年を迎え、原子爆弾の犠牲となられた多くの方々に哀悼の意を捧げます。

また、今なお被爆による後遺症に苦しんでおられる皆様にお見舞いを申し上げます。

貴市におかれましては、市民の皆様のたゆまぬ御努力により、原子爆弾の凄絶な被害を乗り越えられ、今日の発展を築かれました。

また、平和に対する搖るぎない御意思のもと、世界の先頭に立ち、自らがお受けになられた惨状を日本国内はもとより世界中の人々に伝え、「世界の恒久平和」と「核兵器廃絶」の実現を目指し、積極的な活動を長年にわたり展開されておりますことに、心から敬意を表します。

終戦から80年が経過しようとしている現在、戦争や原子爆弾の恐ろしさを直接経験された方々も御逝去され、国民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、戦争や被爆の記憶が次の世代にどう受け継がれていくかが課題となっております。

当市では、今日の平和が、多くの方々の犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを次の世代に伝えていく責務があるとの思いから、次代を担う中学生を貴市に派遣し、「戦争の悲惨さ」や「平和の持つ意義」を深く理解するとともに、想いを一にして、全国から集まる同世代の仲間たちと意見を交わし合うことを願い、様々な研修活動に参加させていただきます。

この貴重な経験を通して、参加者一人一人が「核兵器廃絶のために必要なこと」や「平和のために自らができること」を学び感じ取り、同世代の青少年をはじめとする多くの人々に伝え、人生の糧としてくれるものと期待しております。

私たちの願いにもかかわらず、現在もなお、世界各地において武力が行使され、また、核の脅威が高まり、国際社会の平和と秩序が脅かされる事態が進行しております。

当市は、今後とも、貴市の歩みに学びながら、平和の尊さや戦争の悲惨さを次代に語り継ぐための取組を進めてまいります。また、戦後80年という節目を、新たな平和推進の決意と行動の契機とし、貴市で起きた人類史的惨禍が二度と繰り返されることのないよう、国境や民族を超えた連帯・信頼により、「核兵器のない世界」及び「世界の恒久平和」の実現に向け、不斷の努力を重ねてまいります。

結びに、「核兵器廃絶」及び「世界の恒久平和」の実現を強く念願いたしますとともに、貴市の益々の御発展並びに長崎市民の皆様の御健勝と御活躍を心から御祈念申し上げまして、メッセージといたします。

令和7年8月9日
長崎市長 鈴木 史朗 様

郡山市長 権根 健雄

令和7年9月4日

郡山市

市長 椎根 健雄 様

長崎市長 鈴木 史朗

平和メッセージに対する御礼

残暑の候、貴台におかれましてはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

去る8月9日に挙行いたしました「被爆80周年長崎原爆犠牲者慰靈平和祈念式典」に際し、貴台から「平和メッセージ」を賜りましたことに、心から御礼を申し上げますとともに、貴台の平和に対する深い御理解と御協力に、重ねて感謝申し上げます。

今年、被爆から80年という大きな節目を迎えた。しかし、世界の現状は私たちの願いから大きくかけ離れています。

「被爆による惨劇を二度と繰り返してはならない」。

これは被爆者や被爆地だけではなく、人類共通の願いであり、誓いです。

分断が深まる世界をつなぎ直す原動力となるのは、人種や国境などの垣根を越え、ともに平和な未来を築いていこうとする「地球市民」の視点に他なりません。

被爆者の声が、国際社会に「核のタブー」という概念を形成することに大きな貢献を果たしたように、一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を変える大きな力になります。

永遠に「長崎を最後の被爆地に」するために、志を同じくする地球市民の皆様と手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向け、共に歩んでまいりましょう。

結びに、貴台のご健勝と今後ますますの御活躍を心からお祈り申し上げます。

— 戦後 80 年記念事業 —

令和 7 年度 郡山市中学生長崎派遣事業

「2025 ナガサキへのメッセージ」

事 業 概 要

1 趣旨

市民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを忘れてはならない。

これを次代に伝えるのが今日に生きる私達の使命であると考え、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市における平和への取り組みとして、平和の尊さ、核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を認識してもらうことを目的に、感受性豊かな中学 2 年生を被爆地である長崎市へ派遣して、研修活動を実施する。

また、報告会及びパネル展の開催や報告書の作成・配布等を通して、本市の取り組みについて広く市民への周知を図る。

2 主催 郡山市／平和を考える市民の集い実行委員会

3 事業内容

(1) 事前学習会

派遣団支援者による、長崎市の被爆樹木クスノキをテーマにした特別授業と郡山市の戦災関連資料を見学する事前学習会を開催する。

ア 開 催 日 令和 7 年 7 月 19 日 (土)

イ 開 催 場 所 郡山市中央図書館、郡山市歴史情報博物館

(2) 派遣団結団式及びオリエンテーション

ア 開 催 日 令和 7 年 7 月 23 日 (水)

イ 会 場 郡山市役所特別会議室

ウ 内 容

(ア) 結団式 団員証交付、「平和へのメッセージ」付託、「折り鶴」付託、
団員代表あいさつ

(イ) オリエンテーション

(3) 派遣研修

ア 派 遣 先 長 崎 市

イ 派遣人員 32 名 (役員 4 名、団員 28 名)

ウ 派遣期間 令和7年8月7日（木）～10日（日）

エ 主な研修内容

- (ア) 永井隆記念館（如己堂）及び平和公園見学（8月7日）
- (イ) 山王神社、長崎原爆資料館見学、「平和へのメッセージ」伝達（8月8日）
- (ウ) 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加（8月8日～9日）
- (エ) 長崎原爆犠牲者慰靈平和祈念式典参列（8月9日）
- (オ) NHK 長崎「クスノキ 2025」観覧（8月9日）

（4）郡山市戦没者追悼式

平和の尊さを次の世代に継承するため、式の中で郡山市中学生長崎派遣事業に参加した中学生代表による「平和へのメッセージ」の発表を行う。

ア 発表者 代表者3名

イ テーマ 「平和へのメッセージ」

（5）報告会

ア 開催日 令和7年11月22日（土）

イ 会場 郡山市役所特別会議室

ウ 内容 (ア) 被爆体験伝承者講話、被爆樹コカリナの演奏

(イ) 派遣団員による研修報告

（6）写真パネル展・原爆パネル展（予定）

派遣団員が研修を通して撮影した写真に自身の平和へのメッセージを添えて展示する「写真パネル展」及び原爆に関する資料（日本非核宣言自治体協議会提供のポスターほか）を展示する「原爆パネル展」を開催する。

ア 第1回 (ア) 期間 令和7年11月22日（土）～12月5日（金）

(イ) 会場 郡山市役所アートスペース

イ 第2回 (ア) 期間 令和8年2月2日（月）～2月16日（月）

(イ) 会場 郡山市立中央公民館

ウ 第3回 (ア) 期間 令和8年3月2日（月）～3月22日（日）

(イ) 会場 郡山市立美術館

（7）報告書

派遣研修の成果についてまとめた『令和7年度 郡山市中学生長崎派遣事業「2025 ナガサキへのメッセージ」報告書』を作成し、関係機関へ送付する。また、報告会及びパネル展会場において来場者に配布する。

令和7年度 郡山市中学生長崎派遣団 派遣団員名簿

役 員

役職名	氏名	所属
団長	穴澤 修作	郡山市総務部行政マネジメント課長
副団長	小林 延匡	平和を考える市民の集い実行委員会監事
支援者	星 美由紀	郡山市立郡山第三中学校教諭
事務局	大竹 勘太	郡山市総務部総務法務課主事

団 員

番号	学校名	氏名
1	日和田中学校	宍戸 蒼
2	行健中学校	加藤 真琴
3	明健中学校	長谷川 慎
4	安積中学校	大和田 樹
5	安積第二中学校	田代 珠々
6	三穂田中学校	斎藤 栄太
7	逢瀬中学校	吉川 朱音
8	片平中学校	七海 豪
9	喜久田中学校	本田 結万
10	熱海中学校	牧園 康太郎
11	守山中学校	二瓶 瑞基
12	高瀬中学校	遠藤 み央
13	郡山第一中学校	前澤 勇羽
14	郡山第二中学校	根本 瑛多

番号	学校名	氏名
15	郡山第三中学校	堀川 かなえ
16	郡山第四中学校	中野 喜来
17	郡山第五中学校	藤田 奏
18	郡山第六中学校	和田 暖仁
19	郡山第七中学校	本間 ひなな
20	緑ヶ丘中学校	佐藤 圭一郎
21	富田中学校	上野 茉那
22	大槻中学校	田村 帷那
23	小原田中学校	前原 こう
24	宮城中学校	熊田 蘭
25	御館中学校	横田 夕乃帆
26	郡山ザベリオ学園中学校	木村 真緒
27	西田学園	村上 正悟
28	湖南小中学校	龜山 愛心

「2025 ナガサキへのメッセージ」研修行程

8月7日(木)

5:00集合 郡山市役所	5:00 出発式	5:10 バス	9:20 羽田空港	10:55 飛行機 ANA663 ※機内にて昼食(弁当)
13:30 長崎空港	14:00 バス	15:00 (案内人つきで見学) 原子爆弾落下中心地碑・平和公園・如己堂・永井隆記念館・浦上天主堂	17:00 バス	
17:30 出島	18:10 バス	18:40 宿舎	18:50 夕食・平和かみしばい・ミーティング	20:30 就寝

8月8日(金)

7:00 起床	7:30 朝食	8:30 宿舎	バス 9:00 山王神社・原爆資料館 (市長メッセージ伝達)	12:00 12:05 昼食(長崎アザレア)	13:15
	13:20 バス 青少年ピースフォーラム1日目(平和会館)		17:30 バス 18:00 青少年ピースフォーラム交流会 (長崎新聞文化ホール) ※軽食		19:30
	20:00 宿舎	20:30 夕食・ミーティング	21:00 就寝	22:30	

8月9日(土)

6:30 起床	7:00 朝食	8:00 宿舎	バス 8:50 平和祈念式典 (平和公園／出島メッセ長崎)	11:50 12:20 昼食 (和泉屋)	13:20
	バス 13:30 青少年ピースフォーラム2日目 (出島メッセ長崎)	17:10 徒歩	17:30 NHK長崎「クスノキ2025」観覧 (長崎スタジアムシティ) ※弁当	21:30 バス 22:00 宿舎	23:00 就寝

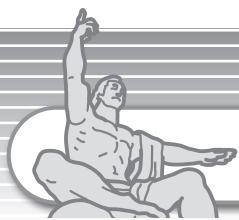
8月10日(日)

6:00 起床	6:30 朝食	7:30 ミーティング	8:30 宿舎	9:00 バス 9:20 南山手地区 (大浦天主堂、グラバー園等)	10:50
	バス 11:00 (長崎内外俱楽部)	昼食 12:00 バス	12:40 長崎空港	16:00 飛行機 ANA666	17:30 18:30 羽田空港
	バス ※軽食 22:00到着 郡山市役所	22:00 到着式	22:00 22:20		

§ 研 修 風 景 §



「平和祈念像」にて



写真で綴る長崎派遣研修風景 ①



①7月23日に市役所で結団式を行いました。長崎での研修に向け、団員が気持ちを一つにしました。



②8月7日朝、市役所で出発式を行いました。団員代表の前澤さんが研修に向けての抱負を発表しました。



③原子爆弾落下中心地。原子爆弾は、松山町171番地の上空約500mで炸裂しました。



④平和公園。原爆犠牲者の慰靈と世界の恒久平和を祈念して建てられた平和祈念像の迫力に圧倒されました。



⑤平和祈念式典が行われる平和公園で、平和の鐘や平和の泉を見学しました。平和案内人の方の説明を真剣に聴いていました。



⑥如己堂・永井隆記念館。自らも被爆しながら平和を願い続けた博士の生涯に感銘を受けました。



⑦浦上天主堂。カトリック信徒によって30年かけて造られましたが、原爆により壊滅的な被害を受けました。



⑧出島。徳川幕府の命により築造された人工の島。江戸時代の日本において、西欧への唯一の窓口となり、近代化に貢献しました。



⑨夕食後は、チンドン屋という商売宣伝の職業をテーマにした平和かみしばいの読み聞かせがありました。



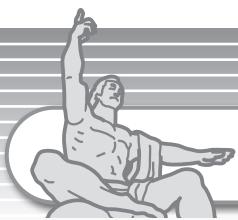
⑩2日目、山王神社。原爆により、枯死寸前となりながらも、再び樹勢を盛り返したクスノキがあります。青々と葉を茂らせている姿に、生きる力強さを感じました。



⑪一本柱鳥居。山王神社にある片方の柱だけ残した鳥居は、原爆による爆風に耐え、現在も当時のままの姿で立っています。



⑫原爆資料館。被爆の惨状をはじめ、原爆が投下されるに至った経過、および核兵器開発の歴史などについての資料が展示されています。



写真で綴る長崎派遣研修風景 ②



⑬原爆資料館を見学しました。原子爆弾の模型や被爆写真などを見て、被爆の実相を学びました。



⑭椎根市長から長崎市長への「平和へのメッセージ」を、派遣団の代表が長崎市原爆被爆対策部被爆継承課長に届けました。



⑮市民の皆さんから託された千羽鶴を奉納しました。



⑯青少年ピースフォーラムに出席。被爆体験講話では、三瀬 清一朗さんの貴重な体験をお聴きし、原爆の無差別性、非人道性を知りました。



⑰青少年ピースボランティアに案内され向かった平和祈念館の追悼空間には、普段、原爆死没者名簿が納められています。



⑱3日目。8月9日。平和祈念式典に参列しました。平和公園で挙行された本式典に、17名の団員が参列しました。



⑯中継会場の出島メッセ長崎で参加した生徒たちは、献花を行い、ハンドベルの演奏や詩の朗読を聴きました。



⑰青少年ピースフォーラム 2日目。全国から集まった仲間と「違うってどういうこと？違うって悪いこと？」をテーマに違いによって起こることについて話し合いました。



⑱特別講演をしてくださった、元マレーシア首相のマハティール・ビン・モハマド氏と一緒に集合写真を撮りました。



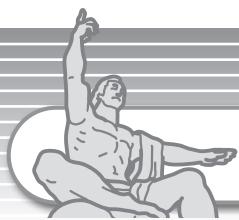
⑲NHK長崎「クスノキ 2025」観覧。福山雅治氏による楽曲「クスノキ」を直接聴き、生命の逞しさや平和な世界への願いを肌で感じました。



⑳4日目のミーティング。引率役員から青少年ピースフォーラムの修了証書が一人一人に渡されました。



㉑世界遺産にも登録された大浦天主堂を見学し、長崎の歴史と文化に触れました。



写真で綴る長崎派遣研修風景 ③



㉕国指定重要文化財にも指定されている住宅が集まったグラバー園を見学しました。



㉖郡山に到着し、市役所で到着式を行いました。団員代表の木村さんが今後に向けての決意を述べました。



㉗1班団員 (左上から) 上野 茉那、田代 珠々、
本田 結万、藤田 奏 (班長)、(左下から) 宍戸 蒼、
前澤 勇羽、牧園 康太郎 (敬称略)



㉘2班団員 (左上から) 田村 惺那 (班長)、和田 暖仁、
根本 瑛多、齊藤 栄太、(左下から) 前原 虹、
横田 夕乃帆、加藤 真琴 (敬称略)

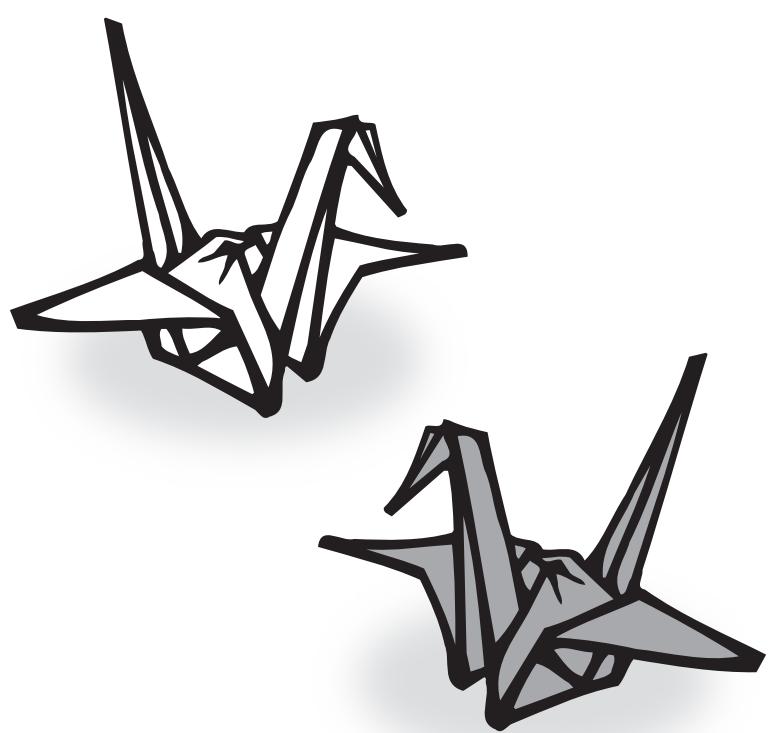


㉙3班団員 (左上から) 本間 陽菜 (班長)、木村 真緒、
堀川 かなえ、吉川 朱音 (左下から) 七海 豪、
二瓶 瑞基、村上 正悟 (敬称略)



㉚4班団員 (左上から) 遠藤 望央、亀山 愛心、
大和田 樹、中原 晴来 (班長)、
(左下から) 長谷川 慶、熊田 蘭、佐藤 圭一郎 (敬称略)

§ 団 員 報 告 §



平和への道



郡山市立日和田中学校2年 宍 戸 蒼

1 派遣研修への参加に当たって

僕が今回、長崎派遣に参加したいと思ったのは、小学生のころから「いつか長崎に行って自分の目で確かめたい」という気持ちを持ち続けてきたからである。授業や本で学んできた戦争や原爆のことは、知識としては理解していても、実際の地で感じる重みはきっと違うだろうと感じていた。また、実際に被爆者の方々のお話を聞き、資料館や平和公園を訪れることで、平和の大切さをより深く心に刻みたい。そして、その学びを未来の自分や周囲の人に伝えていけるようにしたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆記念館では、原爆で被爆した医師・永井隆博士の生涯や「己の如く隣人を愛せよ（如己愛人）」という精神、平和への願いを学んだ。館内には博士の遺品、写真、直筆の書画、緑婦人のロザリオなどが展示されていて、苦しみのなかでも人を思いやり、平和を訴え続けた姿に触れることができた。

このように永井隆博士が原爆で妻を失い自らも重傷を負いながらも、病床から被爆者の救護や平和発信に尽くしていることに感動し、素晴らしいと感じた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは2日間にわたって行われた。1日目は被爆体験講話など。被爆者本人からお話を聞き、原爆の悲惨さ、そして様々な長崎の戦争について詳しく教えていただいた。戦時下の生活を類似体験したとき、付箋に書いた自分の大事なものがほぼほぼ失われていくことを知り、戦時中は平和も大事なものも

何もかもが失われ、恐怖におびえていたということを改めて知ることができた。

ピースフォーラム2日目はピースボランティアの方々と同年代の自治体参加者を含めた班のみんなで意見交換を行った。意見交換の前にアイスブレイクとしてNGワード自己紹介を行い、緊張をほぐしつつ相手のことを知ることができた。

意見交換では「違うってどんなこと？違うって悪いこと？」をテーマとしてどのような違いがあるか、その違いによって、何が起こるのかを付箋紙に記入して模造紙に貼って意見を交換し、まとめていった。違いが争いの原因や助け合いのきっかけにもなると気づくことができた。

(3) 平和祈念式典

3日目の8月9日。被爆80周年長崎原爆犠牲者慰靈平和祈念式典が行われた。最初に被爆者合唱として「もう二度と」が歌われた。その後、市議会議長からの式辞、市長からの平和宣言、平和の誓いなどを聞き、長崎の原爆について改めて深く知る式典となった。児童合唱では、被爆二世である福山雅治さんが長崎原爆に対しての思いを込めた「クスノキ」を小学生たちが心を込めて歌う姿にとても感動した。来賓からの挨拶を聞いたのち、作曲・大島ミチルさんの「千羽鶴」を合唱した。この祈念式典に参加できたことや合唱に込められた思いを感じ取れたことを光栄に思う。



<11時2分で止まった柱時計>

3 心に残ったこと

写真は原爆が炸裂し、11時2分で止まってしまった柱時計である。80年と長い年月がたっていてもなお時計は動いていない。しかし今、長崎は復興を遂げ続けている。この時計が動かなくなった後、壊れた建物の木材などを集めて、小屋を建て始めるところから復興が始まった。草木が70年生えないだろうと言われていた土地にもいつしか草木が芽吹き、以前と変わらない風景を取り戻した。

その後長崎の悲惨さを後世に伝え続けるため、1955年に平和公園が開園し、平和祈念像が建てられた。今回の研修で訪れた原爆資料館等も長崎の歴史について伝えていくために建てられた。一方で被爆当時のものをそのままの形で残している一本柱鳥居などもあった。こうしてこの柱時計が止まっていても歴史は動き続けている。僕たちにはこのことをさらに後世に伝えていく責任があると思う。一人ひとりの力は小さなものだが、長崎派遣に参加した僕たちから、長崎のことを少しでも発信していけたらと思っている。

4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎派遣に参加して、平和の大切さと命の尊さを改めて実感した。原爆資料館や被爆者の方の講話を通して、戦争の悲惨さや、一瞬で多くの命や日常が失われていった現実を目の当たりにした。そこで感じたのは、「平和は当たり前ではなく、守り続けていかないといけないもの」だということだった。

被爆地で過ごし、祈念式典に参加したこと、亡くなられた方々への哀悼の思いがより一層強まった。さらに同年代の参加者と意見交換し、互いに平和への思いを共有することで、多くの人が同じ気持ちを持っているのだと心強く思った。

この体験を通じて、戦争の悲惨さだけでなく、今生きていることや、周囲の人々との毎日がいかに尊いかを深く考えるきっかけとなった。長崎で学んだことを、家族や友人などに語り伝えて、少しでも平和への願いを広めていきたいと強く思う。

平和の尊さ



郡山市立行健中学校2年 加藤 真琴

1 派遣研修への参加に当たって

私がこの長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは、母から原爆関連の資料を見せてもらったことだ。それは、長崎の原爆被害記録写真集と、広島の「はだしのゲン」だ。

二つの資料を見たとき、とても衝撃を受けた。皮膚が腕から垂れ下がる人。通常ではありえないほどのやけどを負っている人。そして、こんな悪夢のようなことが実際に起きたことに、私は目を背けたくなった。しかし、今、世界で争いが起こっており、同じような苦しみを感じている人がいると考えると、ただ知らないふりはできないと思った。

だから、このような世の中で今一度平和の大切さ、原爆がもたらす大きな被害を、多くの人に知ってもらうため、この派遣事業に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 山王神社

山王神社には一本柱鳥居と被爆クスノキがある。まず、一本柱鳥居についてだ。一本柱鳥居は、主婦の方々による1円（現代のお金で約3,000円）ずつの寄付で作られたものであり、鳥居の下には寄付した方々の名前が刻まれている。しかし、原爆の爆風や熱線によって、鳥居の半身が吹き飛ばされ、熱線によって名前が刻まれている部分が一部溶けてしまった。人々の苦労、想いを簡単に吹き飛ばした原爆に、わたしはただただ怒りが湧いた。

被爆クスノキは、500～600年の歴史を持つ大きなクスノキだ。私も実際に見たが、とても大きく、莊厳な雰囲気があった。このような木も、原爆で被爆した。爆風によって巻き上げられたコンクリート片や鉄片が木の穴から入っ

てしまった。それによって、木の治療が必要になったこと也有った。しかしクスノキは、原爆の被害に負けず、今も山王神社で青々と葉を茂らせ、静かに原爆の恐ろしさを訴えている。原爆の被害について人身被害にしか目を向けていなかったので、自然も被害を受けるのは意外でとても驚いた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、被爆体験講話を聴き、さらに戦争体験や、沖縄や東京など様々な場所から来た派遣団員たちと意見交換するなど有意義な時間を過ごせた。

特に心に残ったのは戦争体験だ。戦争体験では、まず、大切なひと、もの、ことを一枚ずつカードに書く。そして戦争の動画が流れる中で、そのときの状況に当てはまるカードを捨てていくというのだ。最初の質問では一枚もなくならず、高をくくっていた。しかし、次の質問では、遠くにいる人や外の店には行けなくなり、一気に6、7枚くらいのカードがなくなった。最後の質問では大切な家族、ぬいぐるみがすべて消え、そのとき持っていたのは「努力」だけだった。心にぽっかり穴が開いたように感じられ、しばらく呆然としていた。もしこれが現実だとしたら、悲しみのあまり、最後に残った「努力」も意味をもたないだろう。しかし、これを実際に体験した人はたくさんいる。この世界のどこかでも、今このときに大切なものの、ひとを失っている人がいる。亡くなった方々のご冥福をお祈りするとともに、これ以上つらい思いをさせないように、もっと平和や戦争について学び、多くの人に伝えていきたい。



＜青々と葉を茂らせるクスノキ＞

（3）平和祈念式典

今回の平和祈念式典では、郡山市派遣団員の代表として、全団員の半分の人数が参列し、私はその中の一人だった。特に心に残ったのは鈴木史朗長崎市長の「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」という言葉だ。この言葉は、故・山口仙二さんが国連本部で被爆者として初めて演説したときの言葉だ。鈴木史朗長崎市長の口調から、故・山口仙二さんが今までに味わった苦労、そして「絶対に世界から核兵器をなくす」という痛切な決意が伝わった。この言葉を心に刻み、平和の尊さを忘れずに生きていきたい。

3 心に残ったこと

4日間の派遣研修を通して、一番心に残った研修場所は、平和公園の中にある平和の泉だ。平和の泉は、水を求めて亡くなった方々の靈を慰めるために作られた。泉の周りには、火が迫ってくる様子が描かれたタイルがある。

当時被爆した人の中には近くの川に水を求めて飛び込んだ人も多いが、その水には「黒い雨」が混じっていた。しかし、それでも人々はその水を飲んだ。なぜそんな水を飲むのかと思うかもしれない。だが、その当時は原爆によって体内がボロボロになり、周りは尋常じゃないぐらいに熱く火の海になっている。もし私がその立

場だったら同じことをしてしまうと思う。今、争いが起きている地域でも、きれいな水を求めている場所がある。いま私たちが、水や食料に困らず、住む場所もあり、ミサイル、原爆に怯えないで暮らせることは当たり前ではないということを改めて実感した。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣研修に参加して、改めていま私たちが過ごしているこの日常は、当たり前のことではないことを痛感した。授業では大まかにしか学ばないが、実際に被爆者のお話を聞くことで、より生々しい、その時の具体的な様子を知ることができた。それぞれの原爆投下の日や終戦記念日には、テレビや新聞で特集などもしているので、これまで以上に関心をもち、積極的に見ていきたい。

今回、学校の文化祭で派遣研修について発表する機会を頂いた。全校生や先生方に普段、授業でしか触れない平和についてより深く知っていただく貴重な機会となる。生徒の中には、あまり戦争や原爆についてあまり関心がない人や、怖くて今まで目を背けていた人もいるだろう。言葉や表現を工夫し、「原爆が落とされたのは紛れもない事実であり、もう決して繰り返してはならない」ということを一番に伝えてていきたい。

当たり前という平和



郡山市立明健中学校2年 長谷川 慈

1 派遣研修への参加に当たって

私は今、何不自由なく平和に生活することができている。しかし、このような生活を送れるようになるまで、日本は悲惨な戦争を経験してきた。私が住む郡山でも空襲によりたくさんの犠牲者が出てと新聞で知った。自分が生活している地域でそのようなことが起きていたのだと知っても、正直あまり実感は湧かなかった。そして、広島・長崎の原爆ではさらに多くの人の命が一瞬で失われ、生き残った人々は心に深い傷を負った。しかし、その原爆を経験した人が、今少なくなっている。原爆の本当の悲惨さを知り、伝えられるようになりたい、そして世界で唯一被爆した日本、中でも長崎で実際に見て感じ、自分の学びを広げたいと思い、この研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

「長崎を最後の被爆地に」

一番始めにこの言葉が目に飛び込んできた。

11時2分で止まった時計、黒焦げになったお弁当、長崎に落とされた原爆「ファットマン」。その他にも、当時の現状を物語る、目を奪われるような展示がされていた。それらは、始めの言葉を訴えているようだった。

特に印象に残ったのは当時の現状を写した写真だ。人が真っ黒になって、倒れている。そんな状況は初めて見た。それは、親子であったり、性別が分からぬ状態になっていたりした。さらに、骨だけになってしまっているものもあった。こんな悲惨なことが起きてしまったことに、私は衝撃を受け、信じられなくなってしまった。しかし、二度と同じことを繰り返さないために、目を背

けたくなるようなことが本当にあったのだという事実を受け止めることはとても大切だと思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは2日間にわたって行われた。1日目は、被爆当時、伊良林国民学校5年生だった三瀬清一朗さんの、被爆体験講話があった。本当に被爆された方の話を聞くと、とても現実味を帯びていて、経験をしていない自分でも、恐怖をおぼえた。私は清一朗さんの話で印象に残った言葉がある。それは「当たり前の生活ができることが平和。平和は人類共通の世界遺産」という言葉だ。当たり前の生活ができることが平和ということは、その後の平和学習で実感した。戦争の疑似体験で、自分が付箋に書き出していた大切なもののや、好きなことが、戦争が進むたびに次々と奪われていく現実を知ったからだ。これが自分の身に起こったと想像すると、耐えられると思えなかった。清一朗さんがそのようなつらい過去を話し、伝えてくださった平和の尊さ、戦争の悲惨さについて、次は自分が伝えていきたいと思った。

2日目の意見交換会では「違い」とは何か、それによって何が起きるかについて考えた。私たちの班では様々な「違い」があるから良し悪しが生まれ、それを良い方向へつなげていくために、会話をして相手をよく知ることが大切だと考えた。自分と違う人と話することで、自分の考えが広がり、貴重な経験となった。



＜希望を与えたクスノキ＞

3 心に残ったこと

上の写真は、山王神社の被爆クスノキである。このクスノキは爆心地から約800mに位置していた為、熱線・爆風の影響を受け、枝や葉は吹き飛び、黒焦げになってしまった。その時、長崎は今後70年、草木も生えないと言われていた。しかし、このクスノキはそのような状況から芽を出し、長い年月をかけ、ここまでの大木にまで成長した。それは、当時の人々を勇気づけ、希望を与えたと思う。

私も実際にこのクスノキを間近で見ると、今まで悩んだり、嫌になったりしていたことが、ほんのちっぽけなことに思えてきた。クスノキは、被爆した当時の人々だけでなく、現代を生きる私たちにも希望を与えてくれるような大きな存在であると感じた。これから生活していくうえで辛いことがあったとしても、クスノキの生命力のような強い精神力で乗り越えていきたい。

4 派遣研修に参加して感じたこと

「戦争」は自分が生まれる前にあった出来事で、今まで知識として学んできたことも、実際には信じられずにいた。しかし、長崎派遣研修を通して、戦争がもたらした原爆によって、長崎の人々が受けた、言葉で表せないほどの悲惨な出来事を目の当たりにし、本当に起こってし

まった事実なのだと実感した。

自分が毎日当たり前に生活できている平和な今。それは、戦争が始まることですべて奪われてしまう。その当たり前を奪う核兵器が今も存在している。悲惨な過去を二度と繰り返さないために、次は私が、まずは身近な人へと戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えていきたい。それが派遣研修に参加した私の使命なのだと思う。

今回の派遣研修では同じ中学2年生の仲間と、会話をすることで、自分の意見をさらに深め、考えを広げることができた。そして、自分の成長につながる貴重な経験をすることができた。私は人と会話をするのは得意ではなかったが、会話をしていくほど自分にはプラスなことがあると実感できた。会話で相手のことを知り、認め合うことも、平和な今を続けていく1つの方法であると思う。

長崎に行かなければできない、見て、聴いて、感じることによる、貴重な経験をすることができた研修であった。被爆者の方が少なくなってきた今、これから平和のために、私ができることはいくらでもある。自分一人では小さな力でも、私が学んだことを伝えることで、平和とはいかに尊いものであるかみんなに知ってもらいたい。そして、それがバトンのように繋がっていくことを望む。

核兵器のない平和の世界に



郡山市立安積中学校2年 大和田樹

1 派遣研修への参加に当たって

僕が今回の長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは、大きく2つある。1つ目は、被爆者や戦争経験者の高齢化が進んでいることを知ったことだ。戦後80年という長い年月が経ち、戦争のことを当時の方の生の声で聴ける機会が年々少くなりつつある。だからこそ、今のうちにしっかり聞いておき、後世に話を伝える一員になりたいと思った。

2つ目は、今年で3年目になるロシアのウクライナ侵攻や、パレスチナ・ガザ地区などの紛争が起こっているからだ。ニュースを見ていると、理不尽で悲惨な紛争に巻き込まれてしまっている人々の姿をよく目にすると。そのため、今すぐにでも戦争について詳しく知りたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 一本柱鳥居とクスノキ

被爆前は立派な鳥居として立っていたのだろうと想像できる太い鳥居の足の片方が折れていた。もともとは山王神社の第二の鳥居だったが、爆風の影響で片方の柱が折れ、一本柱鳥居になってしまっている。また、柱の根元に鳥居を作るためにお金を寄付した人の名前があったが、熱線を浴び、溶けて名前が掘られたところは見えなくなっていた。

長崎に原爆を落とされた後、70年間は草木も生えないだろうと言われていた。だが、原爆投下から数か月後にはクスノキが芽を出し、当時長崎に住んでいた人達は徐々に元気を取り戻していった。植物の生命力の強さを知り、自分の肌でクスノキの生きる力を感じることができた。

(2) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館の入口には、11時2分を指着している時計があった。原爆爆発時刻を指着している木造の時計である。他にも、熱線で溶けた瓶の実物や当時の写真が多くあった。特に、当時の写真が残っている事は、すごい事である。それらの写真は、政府に渡すように言われていたのだが、実情として、提出された写真は政府によって処分されていた。政府は、日本が負けていることを国民に知られたくないからだ。写真を処分されてしまうと予測していた人々は、後世に伝えるために写真の一部を残していた。特に印象に残ったことは、放射線による被害のことだ。当時の被爆者たちは放射線のことを知らずに次々と亡くなっていた。「被爆者には近づくな」、「被爆者の子は何かしらの不自由をもって生まれる」と、根拠のない差別を受けていた。さらに驚いたことは、今も放射線の被害に脅かされている人がいるということだ。東日本大震災が起きた年に福島県で生まれ育った僕にとって、とても印象に残る出来事だった。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、2日間に渡って行われた。1日目は、被爆体験講話から始まり、平和会館ホール周りでフィールドワークをした。2日目は、全国各地の学生と意見交換をした。意見交換では、「なぜ喧嘩は起きるのか」や「喧嘩の解決方法」を班ごとに考え、意見を交わした。僕の班では、喧嘩は「意見の食い違い」や「主張の違い」のせいで起きるのではないかと意見を出し合った。世界では、「主張の違い」がぶつかり実際に戦争が起きている。意見の食い違いや主張の違いは仕方ないとは思うが、お



<山王神社の本殿>

互いが認め合うことができれば、戦争は起きないのではないかと思った。

3 心に残ったこと

僕が特に印象に残ったことは、平和祈念式典だ。会場の平和記念公園には平和を願った像がある。右手が差しているのは原子爆弾が落とされ爆発した空を指し、左手は水平に手を横にしていて平和を表している。その大きさも印象的だった。

会場は約2時間前から大雨が降り始め、会場に入るのにも苦労した。だが、式典が始まる約1分前から「ピタッ」と雨が止んだ。偶然だとしてもすごいと思った。そして、式典が始まった。式典では長崎市長の言葉が強く残っている。「『武力には武力を』の争いはやめてください」と話した言葉だ。武力を完全になくすことはできないが、僕たちには言葉がある。武力ではなく「言葉」で解決してほしいと思った。他にも、石破内閣総理大臣の式辞などもあった。黙とうの時には、「安らかに眠って欲しい」「戦争や原子爆弾の恐怖を二度と繰り返さないために『伝える』ということを大事にしていきたい」と考えていた。そして式典が終わりバスで移動している時、雨が降り始めた。やはり人の祈る力はすごいものだと思った瞬間だった。僕は、「思いはちゃんと伝わっているな」と思い、嬉しい

瞬間でもあった。

4 派遣研修に参加して感じたこと

平和。それは僕たちにとって日常的な事だ。だが、その平和は決して簡単に生まれたことではない。そう思えるようになった。

戦争によって壊された浦上天主堂や山王神社の鳥居なども見てきた。原爆が落とされる前の写真も見た。こんなにきれいな景色、建物が一瞬にして焼け去ってしまった。あたりまえの日常が、光と共に消え去ってしまった。それがどれほど辛かったかを、僕たちは知ることはできない。

被爆者の三瀬清一朗さんからのお話があった。平和とは、あたり前に食べるものがあり、住むところがあり、着るものがある。そんな「あたり前の生活ができる」とが平和だと訴えていました。その「あたり前の生活」が出来ていない国が世界中で増えつつある。さらに、今ある核弾頭は広島や長崎に落とされたものと比にならないほどの威力の物が約10,000発もある。そんなものは世界のどこにも落とさせない。長崎を最後の被爆地にする。それが僕たちにできることだと思う。だからこそ、友人や家族に話し、その友人や家族からも「平和」について話してもらい、平和の輪を広げていきたい。

平和の尊さ



郡山市立安積第二中学校2年 田代珠々

1 派遣研修への参加に当たって

「平和の尊さを認識し未来へ

平和をつないでいく」

現在もなお、世界では複数の大規模な戦争や紛争が起きている。これらの紛争は、領土、政治的不満、宗教的・民族的対立、資源を巡る争いなどが原因である。その影響により、一般市民は安全な生活を奪われ、特に子どもが大きな被害を受けるのが現状である。

かつて、私たちが住む日本でも戦争が起きていた。たった1つの被爆国として、当時の長崎での出来事について詳しく知りたいと思った。

日本が戦後80年を迎えた今、平和に暮らしているからこそ、戦争の悲惨さ、命の尊さを自分の目で見て学び、自分の言葉で数多くの人へ、この「平和学習」の内容を伝えていきたいと思い参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

資料館では、熱線で火傷した人達の写真などがあり、どれも目を背けたくなるものばかりだった。

「焼き場に立つ少年」既に亡くなっている弟を背負っている少年が、どのような気持ちで火葬の順番を待っているのかと思うと胸が痛んだ。

「被爆時計」激しい熱線と爆風によって11時2分で止まった時計。原爆が止めたのは、時計の針だけではなく、当時の長崎で暮らす人々の生活や人生そのものである。

「ファットマン」長崎に落とされた原子爆弾。この一つの爆弾によりたくさんの命が奪われた。

核兵器による被害を知りながら、核を保有し

ている国が9か国もあり、恐怖と共に怒りも覚えた。

原爆の脅威から世界を守るため、核兵器を失くして欲しいと心から訴えたい。

(2) 青少年ピースフォーラム

1日目は被爆体験講話にて三瀬清一朗さんのお話を聞くことができた。三瀬さんは、爆心地から3.6kmの屋内で被爆した。空襲が来ると目と耳を押さえ、眼球が飛び出したり鼓膜が破れたりしないよう訓練を受けていたという。小学校は救急所、そして校庭は火葬場にもなった。8月15日に終戦を迎え、「負けてよかったです」と心から思ったという。戦争は、子どもが1番大変であり、当たり前の生活ができなくなる。「平和は人類共通の世界遺産」と次世代へ継承したいとのことだった。

2日目は「平和・自分たちの未来について考えよう」をテーマに意見交換をした。「平和」とは争いのない状態である。争いは互いの違いを認めないことから始まる。平和につながる一步、すなわち「最初の一歩」は対話や交流を重ね、互いの立場や違いを認め合い、理解し合い信頼を築いていくことが大切だと学んだ。

(3) 長崎平和祈念式典

今から80年前の8月9日11時2分、原子爆弾が炸裂したことにより、長崎の街は一瞬で焼け野原となり、同時にたくさんの尊い命が犠牲になった。私は、平和祈念像と同じ想いを込め原爆犠牲者の冥福を祈った。式典では、献水という儀式が行われた。原爆犠牲者の慰靈のため、水を求めるながら亡くなった方々を悼み、慰靈碑に水を捧げる。戦争を経験した世代の苦しみや平和への強い願いを想像しながら参列した。



＜被爆クスノキ＞

3 心に残ったこと

かつて原爆の熱で焼かれ、枯れ木同然になりながらも朽ち果てることなく、奇跡的に今も生き続けている山王神社の「被爆クスノキ」。幹には、傷跡や空洞もあり、爆風で飛び込んできた小石や破片がそのまま保存されていた。原爆に耐え、逞しい生命力を目の当たりにした。このクスノキと同じように被爆された方々が悲しみを乗り越え、生きようとする前向きな強さ、想像を超える苦労と努力があり、長崎の街は復興を果たしたのだと思う。

この被爆クスノキを題材に作られた福山雅治さんの楽曲「クスノキ」。“すべての命が等しく生きられる世界を願う”という想いが込められている。長崎平和祈念式典では、小学生が合唱し、想いを届けた。私たち派遣団員も、「クスノキ 2025」に参加し福山さんはじめ約 5,000 人の人達と共に歌うことができた。心を一つにして音楽でつながっていく一体感。大迫力で胸が熱くなった。全国各地から年齢や性別に捉われず、集結した人たちと想いを歌で届ける。想いを伝える方法は、言葉だけないことを知った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

国を思い、家族を思い戦う。自由な思いや行動が認められなかった時代が日本にはあった。令和の時代を生きる私には、想像を超える時代なのと思った。

今回、長崎派遣事業に参加して、実際に見て耳で聴いて、戦争の悲惨さ・理不尽さ・残酷さに背を向けたくなる場面も多々あった。しかし、現地でしか分からない「8月9日の出来事」を知ることができた。

また、全国各地の方々とたくさん意見交換し、話を聞くことで様々な考え方や想いがあること、同じ世代でも違いがあると気付いた。

悲惨な過去を風化させず、引継ぎ、戦争の愚かさや平和の大切さを伝える必要がある。これは、平和な暮らしが持続できる幸せを改めて感じたからである。

平和につながる、最初の一歩に加え、相手を思いやる気持ち、想像力を働かせ「安心して過ごせる未来」へ向けて、自分の想いを伝えられる一人になりたい。

繰り返さない、繰り返させない



郡山市立三穂田中学校2年 齊 藤 格 太

1 派遣研修への参加に当たって

戦争。もちろんだが、私はそれを経験したことがない。自分が生まれた2011年から現在まで、日本は戦争にかかわっていないからだ。戦争関連で入ってくる情報と言えば、ウクライナ侵攻などの紛争のニュースや、歴史の授業などである。

しかし、本当の戦争を経験していない自分が、「戦争の苦しさ」や、「平和の尊さ」などを本当に理解することはできないのではないか。だからといって、実際の戦争を経験するわけにいかない。そこで、過去に実際起こった原爆投下の歴史を学ぶことで理解出来ることがあるのではないかと思い、今回の長崎派遣に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館には当時の状況の悲惨さを伝えるものが数多くあった。その中でも特に印象深かったのは、原爆の熱線により表面が泡立ち、荒れた瓦だ。唯一触れることが出来た展示品で、触れてみた感覚はぶつぶつしていた。私が知っている瓦は表面が滑らかであり、見た目が全然違うため、これが瓦だということが信じられなかった。

他に印象深かったものは、手の骨とガラスが融合したものだ。これは爆心地付近で発見されたもので、原爆の熱でガラスが溶けて融合してしまっていた。正直、あまりに衝撃的過ぎる説明に自分の目を疑った。ガラスがすぐに溶けるだけでなく、人間の体もすぐに骨だけになったのだ。それほどの熱と爆風が、たった1つの爆弾によって広範囲に襲い掛かったという事実がとても恐ろしかった。

原爆に関する資料を見ていくうちに、原爆がどれだけ甚大な被害を及ぼしたか、それを深く認識することが出来た。

(2) 山王神社

山王神社には、原爆の歴史を伝えるものが2つあり、その1つ目は一本柱鳥居だ。一本柱鳥居というのは、原爆の爆風によって、文字通り柱が一本だけになってしまった鳥居だ。片方の柱しかなくとも未だ立ち続けているその姿は、とても悲惨でありながら、美しいとも感じた。

2つ目は被爆クスノキだ。この木は、原爆による被害を受け、枯れたと思われた。だが、約半年後に芽を出し、今に至る。実際に見てみると、想像よりも大きい木であり、まるで被爆したことを見失っているかのようであった。

(3) 青少年ピースフォーラム2日目

青少年ピースフォーラム2日目は「違うってどういうこと？違うって悪いこと？」というテーマで、班に分かれて意見交換を行った。私達は、様々な「違い」を各自出していき、その「違い」によって何が起こるかを考えた。

この活動をしていくうえで知ったのは、「違い」があることで良いことも、悪いことも起こりうるということだ。私達の班で出たものを例にすると、人それぞれ個性が違うことで、苦手なところを助け合うことができる。しかし、個性が違うと意見の違いも出てくるため、対立してしまうこともある。

そうであるなら、「違い」によって起こる悪いことはどのようにすれば改善できるか。私は、その個人の「違い」をきちんと認め、受け入れようとすることが大切だと考えた。



＜崩された鐘楼＞

3 心に残ったこと

私が今回の長崎派遣で心に残ったのは、原爆により破損、崩壊した浦上天主堂の鐘楼だ。この場所は爆心地から約 500m という、かなり近い距離にある。この崩壊した鐘楼は、総重量約 50t というかなりの重さであり、原爆爆発直後でも辛うじて残っていたが、その後崩れてしまった。

浦上天主堂は当時のキリスト教徒がレンガ一枚ずつ積み上げて造った祈りの場である。多くのキリスト教徒の心の拠り所であり、とても大切にされていた場所だったと思う。しかし、原爆によりなすすべなく、倒壊してしまった。当時のキリスト教徒にとって、心の拠り所、つまり生きる希望の一つを失ったということだ。絶望的なことだったと思う。

想像してみてほしい。例えば、あなたにとって大切な場所があなたの家だとする。その家がたった一発の爆弾によって一瞬にしてボロボロになってしまう。そうなったときあなたは、絶望し、何もできなくなるだろう。つまり原爆は、物への被害だけでなく、人の心にも被害をあたえるのだ。

私は最初、浦上天主堂のことは知らなかった。だが、この建物の被爆は、数多くのキリスト教徒の人々の心に深い傷を付けたのだと感じた。そして、改めて原爆がもたらした被害が、どれだけのものなのかを学ぶことができた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回参加した長崎派遣では、第一に、長崎の今の発展した様子に、少しばかり衝撃を受けた。長崎は、原爆投下後 70 年もの間、草木が生えないと言われていた。だが、この 80 年の間に長崎は復興を遂げ、緑は生い茂り、現在はまるで原爆が投下された歴史などなかったかのように、人々は生活している。だからと言って、原爆の歴史を「無かったこと」にしてはいけない。「無かったこと」にしてしまえば、再び人類は原爆を使ってしまう。原爆を使ってしまえば、再び長崎と同等か、それ以上の被害が出てしまう。今の科学力をもってすればそれは確実なことだろう。

原爆による被害がどのくらいのものなのか、どのような影響をもたらすのかなど、多くのことを学んだ。これから先、いつかは被爆者がいなくなってしまうだろう。原爆の恐ろしさを誰が伝えるのか。核兵器廃絶を訴えるのは誰なのか。勿論、核兵器廃絶を訴えなくてもいい世の中になってほしいが、そのようなことを考えたとき、それを行うのは他でもない、原爆の歴史を深く学んだ私たちなのではないかと思う。二度とこの悲劇を繰り返さないためにも、核兵器の廃絶が一日でも早く行われることを願う。長崎で犠牲になった多くの人々のためにも。

目をそらさずにちゃんと見て



郡山市立逢瀬中学校2年 古川朱音

1 派遣研修への参加に当たって

私は昨年、けんしん郡山文化センターで開催された「ヒロシマ原爆・平和展」を見学する機会があり、戦争の悲惨さを実感した。私は初め、衝撃的な展示に目を背けそうになったが、同行した姉の助言で正面から向き合うことにした。その結果、実物を見たり直接足を運ばないと感じ取れないことがあるのだと実感した。平和な日常は戦争を乗り越えてきた多くの人々による努力の結果であり、戦争と平和について学ぶ必要性を痛感し、私は今回の長崎派遣の参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

数多くの展示品が並ぶ中で、特に強く心に残ったのものは「頭がい骨が付着した鉄かぶと」である。戦争という極限状況の中で命を落とした一人の存在が、無言のまま訴えかけてくるようで、胸が締めつけられた。そのかぶとは確かに生きていた人間の最期を示す証であり、言葉では表現しきれない衝撃を伴っていた。原爆がもたらした破壊と悲劇を直視することはとても辛いことであるが、それを受け止め、過去を忘れず伝え続けることこそが、同じ過ちを繰り返さないために必要であると強く感じた。この資料館での体験は、平和の大切さを改めて心に刻む貴重な時間となった。

(2) 青少年ピースフォーラム

被爆体験講話では、被爆当時10歳であった三瀬清一朗さんの話を聞いた。三瀬さんは爆心地から3.6kmの自宅で被爆した。学校では授業の始めに爆弾が落ちた時の行動について「耳を両方の親指で、人差し指と中指で目を押さえ、

地面に伏せなさい」と教えていた。三瀬さんはこの教えをきちんと守ったので、原爆が投下された際にもすぐに適切な行動ができた。奇跡的に、家族全員が無事だった。

今回の講話では、「声の続く限り、核兵器や戦争の悲惨さを伝えたい」という強い思いが語られ、「平和は人類共通の世界遺産であり、当たり前の生活を送ることこそが最大の幸せである」という言葉が印象に残った。常に強調されていたのは「平和の原点は人と人との心のふれあい」であり、幸せは平和の上にこそ成り立つという点であった。自身の戦争と被爆の体験を通じて、命の尊さや平和のありがたさを伝え続けることの大切さが示された。

私にとって、お互いを理解するための話し合い、つまりコミュニケーションの大切さを改めて感じるとともに、次世代に平和の尊さをつなげていく責任を考えるきっかけとなった。

(3) 平和祈念式典

長崎市長の平和宣言に触れ、核兵器廃絶と恒久の平和への強い願いが胸に響いた。80年の時を経ても、被爆者が語り継ぐ苦しみと悲劇を二度と繰り返さないために、世界中が一丸となって行動することが求められている。「地球市民」として、国境や人種を超えて、共感と信頼を築き、対話を重ねることで平和を作り上げていくべきだ。核兵器廃絶を実現し、次世代に平和な未来を手渡すために、私たち一人ひとりが声を上げ、行動し続けなければならない。



＜現在のクスノキ＞

3 心に残ったこと

8月8日に訪れた山王神社の『被爆クスノキ』が特に印象に残っている。派遣団の事前学習で詳しく学ぶ機会を得たが、同じく山王神社にある『一本柱鳥居』と共に、長崎に行く機会がなければ詳しく知ることはなかった。

実際に目にしたクスノキは、樹齢500年以上、幹回りは約8mという堂々とした姿で、静かに私たちを出迎えてくれた。原子爆弾が爆裂した直後の、爆風と熱線に晒された痛々しい幹の状態から、ここまでの大樹になったエネルギーは計り知れないものがある。また、クスノキの幹には、爆風によって刺さったガラスの破片が、全て取り除くことができず、残ったままになっているとも聞いた。どのような境遇にあっても生きるクスノキと、被爆を乗り越えて力強く頑張っている長崎の人々の姿が重なって見えた。

翌日の9日には平和祈念式典に出席し、世界規模の式典に身が引き締まる思いがした。その夜には、長崎県出身である福山雅治さんの『クスノキ2025』というコンサートイベントにも参加し、多くの人達と一緒に福山さんの『クスノキ』という歌を歌った。「何事もない日常が一番の平和だ」と福山さんが言っていたように、

戦後80年という長い時を経て、平和な世界で生きることができるありがたさを実感した。

4 派遣研修に参加して感じたこと

戦争を知らない私たち世代にとって、目にするもの、耳にするもの、全てが衝撃的だった。学校の授業で学んだ戦争は『昔話』のような感覚だったが、今この時も続いている課題として、私たちこそが率先して学び、正しい情報を広め、誰もが安心して生活できる世界が実現できるよう、活動していくことが大切だと思った。

また、世界各地で続く戦争の即時終結を心から願っている。戦争は多くの命を奪い、傷つけ、罪のない人々を苦しめている。平和な日常は、決して当たり前ではなく、守るべき大切なものである。私たち一人ひとりができるることは、小さな行動を起こし、それを周りの人々に伝えることである。例えば、暴力や差別に反対する声を上げ、対話と理解を促進することだ。たとえ小さな取り組みでも、広がることで大きな変化を生み出す力を持っている。私たちが行動に移すことで、平和の土台が築かれると信じている。戦争をなくすために、私たち一人ひとりができるることを考え、共に行動していく社会を目指したい。

平和な未来へ



郡山市立片平中学校2年 七 海 豪

1 派遣研修への参加に当たって

私は昨年の夏、けんしん郡山文化センターで催された「ヒロシマ原爆・平和展」を訪れ、原爆爆発後の町や被爆した人たちの痛々しい写真を見たり、VRを使って原爆が爆発した瞬間の様子を仮想体験してきた。VRでの体験は衝撃的だった。一瞬で町が消え、多くの人が被害にあい苦しんだ様子は、恐ろしさを覚えた。今まで、戦争や原爆投下については教科書で知っているつもりだった。けれど、80年前に起こった惨事をきちんと知ることで、「平和」とは何かを深く知りたいと強く思い、研修への参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆博士は、長崎医科大学の放射線医学の研究者で医者であり、作家でもあった。放射線医学の研究により、白血病を患っていたが、さらに8月9日の原爆によって、重傷を負ってしまう。しかし、自分の命をかえりみず、他の被爆者や患者の救護活動に力を尽くした。58日間で、125人の被爆者の治療をするほどだった。

自分の事よりも、他の被爆者を助けようとした永井博士が残した言葉が「如己愛人（によこあいじん）」だ。「己の如く人を愛せよ」という意味だ。

永井博士は、原爆投下3日後に家に戻ったところ、妻が骨になって亡くなっていたことを知ってしまう。突然、自分の愛する大切な人を失うことは、大きな悲しみと孤独で、喪失感にかられただろう。心にも体にも傷を負った永井博士の言葉には、愛する妻との幸せな過去をもう一度取り戻したいという思いや、子どもたち

に、明るい未来を創ってほしいという平和への思いも含まれているのだろうと感じた。

(2) 原爆資料館

資料館には、原爆投下後の長崎の町が変化した写真や、原爆の熱によって不自然な形になったガラスビンや黒焦げになった通学カバンなど、被害のすさまじさを知ることができるものが展示されていた。そのなかでも印象的だったのは、館内で最初に目にとまった柱時計だ。原爆が爆発した11時2分を指したまま止まっていた。それは長崎の町が一瞬にして全てを失ったことを物語っているかのように感じた。

さらに、1枚の写真が忘れられない。焼け野原に呆然と立ち尽くす少女の写真だった。少女は予想外の出来事に言葉を失い、啞然とした表情をしていた。家族は、原爆の熱線でとけて黒焦げになり、転がり、家も爆風で吹き飛ばされ、帰る場所がなかったそうだ。何もかもを突然失い、自分だけが生き残った少女がとてもかわいそうだった。もし自分がこの少女だったら…胸がしみつけられた。考えさせられる展示物がたくさんあった。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、2日間にわたって行われ、1日目は、被爆体験講話を聞いた。食べるものがなく、木の実をとて食べたことや、学校の校庭で亡くなった人を埋めて焼いているところを見たという話は心が痛んだ。2日目は、全国から集まった参加者と「違い」とは何かを考え、グループで意見交換をした。私のグループでは、違いによって個性が生まれ、自分の強みを発揮することができるという意見や、偏見や差別が生まれ、いじめに発展するという意見もあった。



＜現在の被爆したクスノキの姿＞

私も、違いは個性で尊重されねばと発言した。様々な意見を聴き、私のなかで新たな考え方や視点を見つけることができた。

全国の同世代の人達との意見交換は、緊張したが、相手に自分の考えを伝える有意義な体験だった。

3 心に残ったこと

この写真は山王神社の被爆クスノキだ。80年前、原爆の熱線と爆風により枝が折られ、幹は黒焦げになり、壊滅的な被害を受けた。しかしその後、再び新芽を出し次第に現在の雄大な姿によみがえった。私は、実物を目の前にしたとき、その迫力に圧倒された。生命力があり、力強さを感じた。

たくましく生きるクスノキに、当時、復興に向かっていた長崎の人達は勇気づけられ、力をもらっていたのかもしれない。

原爆の被害に負けないクスノキの姿は、つらく苦しい体験をしても強く生きる被爆者の方に

寄り添い、ともに平和を訴え続けているかのような気がした。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は4日間の長崎派遣事業を通じて、戦争の悲惨さや、核兵器の恐ろしさを知ることは大事だと思った。それは、戦争の時代を生きた方々の悲しく痛ましい話も、原爆投下による惨状を伝える資料館の展示物も、全て、二度と戦争が繰り返されることがないよう、世界から核兵器がなくなるよう、これから先も平和であり続けるために知るべき事柄だった。

私が今、学校で様々な学びを得られること、部活動で上達したいと汗を流すこと、友達と笑いあえること、家族団らんできること、平和であるからこそ、当たり前の日常が送れるのだと気づかされた。

4日間の貴重な体験で学び、気づいたことと共に、平和の大切さをたくさんの人々に伝えていきたい。

平和のために私ができること



郡山市立喜久田中学校2年 本 田 結 万

1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日、午前11時2分。今からちょうど80年前、長崎に原子爆弾が炸裂した。今まで私にとって戦争は自分には関係ない遠い存在のものだと思っていた。その考えを覆したのは、2022年2月、ロシアによるウクライナ侵攻だ。このニュースを見た時、戦争は身近にあるものであり、今の日常が当たり前ではないことを知った。毎日、戦争の様子や死傷者の数が増えしていくのを見て、とても怖くなつたのを覚えている。今回長崎に行くにあたって、80年前、日本で何が起つり、どのように復興していったのかを知りたいと思った。そして、次世代を担う者の1人として、たくさんの人伝えていきたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和祈念像

平和祈念像は、高さ約9.7m、重さ約30tと実際に見てみると予想以上に大きかった。平和祈念像のポーズには、意味が込められており、空を指す右手は原子爆弾を、水平に伸ばした左手は平和を、閉じられた目は、犠牲者へ、男性なのは、たくましさを意味している。この像は、原爆による犠牲者の冥福を祈るために、被爆から10年後に建立された。私は、平和祈念像の存在は知つていたが、こんなに大きく、このような意味があることは知らなかつた。この像から、長崎の人々の「長崎を最後の被爆地に」という強い思いと平和の尊さを感じた。

(2) 原爆資料館

原爆資料館には、原爆炸裂時刻の11時2分で止まつた時計、溶けた6本のサイダーの瓶、「焼き場に立つ少年」という写真などたくさん

のものが展示してある。どれも見るだけで胸が苦しくなるようなものばかりだった。中でも最も印象に残つたのは、長崎に投下された原爆「ファットマン」の実物大模型である。大きさは、長さ3.25m、直径1.52m、重さ4.5tの plutonium型原子爆弾で威力は広島の原爆の1.4倍もあつた。これが爆発した時に、生じるエネルギーは、爆風50%、熱線35%、放射線15%だ。長崎の街と比べるとはるかに小さい原子爆弾で、1つの街を簡単に破壊してしまう威力を持っていることに驚き、核兵器の恐ろしさを知つた。そして、今、世界にある原子爆弾はほとんど、簡単に注入できる plutonium爆弾だそうだ。何より、これを作つたのは、私達と同じ人間であるということが、胸を締め付けられるような悲しみを引き起つた。

(3) 被爆体験講話

私達は、青少年ピースフォーラム1日目、平和会館で被爆当時10歳だった三瀬清一朗さんから話を聴いた。三瀬さんは、爆心地から3.6kmの屋内で被爆した。奇跡的に家族8名は無事だったが、その後8名のうち4名ががんになつてしまつたそうだ。学校が気になり様子を見に行くと、小学校が焼却場のようになつてしまつたという。想像するだけで胸が苦しくなつた。

三瀬さんは、被爆後、結婚して子供が生まれた時、病院に行く足が重かったそうだ。それは、放射線の影響が遺伝していないかが心配だったかららしい。そして、病院に着いて1番最初に言った言葉は、

「手と足にちゃんと、10本ずつ指がありますか。丈夫な赤ちゃんですか。」
であったそうだ。



＜被爆クスノキ＞

その話を聴いて、私は、言葉が出なかった。自分が放射線を浴びてしまったことで放射線の恐怖だけでなく、根拠のない偏見や差別を受け、苦しめられる。そんな残酷な世界があつてはいけない。そう感じた。

3 心に残ったこと

この4日間の研修で心に残ったことはたくさんあるが、私は最後に山王神社の被爆クスノキを紹介したい。この被爆クスノキは、強烈な爆風と熱線により、枝葉は吹き飛ばされ、枯死寸前になつたにもかかわらず、わずか2ヶ月後に再び新芽を芽吹かせた。原爆で亡くなつた方の主な原因は、風圧、熱線、放射線だ。そのうちの風圧と熱線に耐えたのだ。このクスノキは山王神社の境内にある。山王神社は爆心地から800mほど離れた場所にある。そのため、一の鳥居から四の鳥居まであったが、爆風に対して平行に立っていた一の鳥居と二の鳥居を残し、あとは全て倒壊した。社殿なども全て焼失した。そんな中、クスノキは、今でも枝葉を広げ、堂々と立っている。「70年は草も木も生えない」と言われていた状況の中でこの力強い生命力は、家族や家、住む場所を失つた人々にとって希望であり、勇気をもらえる存在になつたそうだ。

たつた1つの原爆で街を破壊してしまう威力に耐え、生き残つた生命力の強さを感じることができた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣研修を通して、私は原爆の恐ろしさや平和について深く知ることができた。特に、原爆の恐ろしさと被爆者の思いは、現地に行ったからこそより知ることができたのではないかと思う。実際に被爆者の方に話を聴くと、原爆投下から80年もの長い間苦しめたのは、放射線の恐怖だけでなく、根拠のない偏見や差別、経済的な生活の苦しさ、けがの後遺症などだということを知つた。原爆は人や物に大きな被害を与えただけでなく、人々の社会生活そのものや心を一瞬にして破壊した。人々の心や体に深く刻まれた傷は、一生癒えることはない。改めて、原爆の恐ろしさを痛感した。

被爆者の平均年齢が86歳を超えた今、被爆者の方から話を聴くことは、大変貴重な機会となっている。「長崎を最後の被爆地に」するために被爆者の方々が残していった記録や言葉を、家族や友人、先輩、後輩、学校の先生方など身の回りのたくさんの人々に伝えていきたい。

戦争とは……



郡山市立熱海中学校2年 牧 園 康太郎

1 派遣研修への参加に当たって

僕は、小さいころから歴史に興味があり、小学生の時には長崎に原爆が落とされたことは知っていた。しかし、原爆が落とされてから、長崎の町や人々の生活がどうなったかは詳しくわからなかった。中学校で、この事業のことを知り、実際に長崎を訪れて、自分の目で確かめ、理解を深め、自分から平和について少しでも発信できればと思い、参加した。最初は少し不安な気持ちが大きかったけれど、親や友人、先生に励まされてこの事業に参加する決意をした。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和祈念式典

僕は、長崎派遣の3日目に平和祈念式典に参列した。平和祈念式典では、まず默とうをした。僕は、原爆で亡くなってしまった人を供養する気持ちや、これから先の世界平和を願って黙とうを行った。

次に、長崎市長の平和への誓いを聞いた。平和の尊さを切々と訴える市長の姿を見て、戦争や核兵器の使用は絶対に許されないことだと再認識した。

会場は、平和公園の前で、多くの人が参列しており、とても迫力があった。首相をはじめ、多くの政治家がいた。日本の首相が毎年参列する日本の歴史の中でも忘れてはいけない日なのだと強く感じた。

(2) 原爆資料館

長崎には、 plutonium 原子爆弾（ファットマン）が落とされた。重さは 4.5t もあり、地上から約 500m のところで炸裂した。原爆が落とされた近くの温度は、約 3,000 ~ 4,000°C あり、光と熱線の影響で周りにいた人はほとんどが即死してしまったことを知った。そして、4 km 先にも熱線が届いたことや、おおきなキノコ雲で太陽が覆い隠され昼が夜のようになったことも知った。このことから原爆の威力や恐怖が改めて僕の中に伝わってきた。

(3) クスノキ 2025

長崎スタジアムで福山雅治さんの「クスノキ」を聞いた。福山さんの歌を聞いて、山王神社のクスノキを見た当時の人们は、希望や生きる力をもらったというのを聞いたことを思い出し、その考えを改めて深めることができた。

そして、福山さんが被爆 2 世であったことや、「クスノキ」の歌詞を自分で作詞したことを知った。戦争のことを歌うことが、福山さんにとって、戦争を風化させないやり方なのかなと思った。実際にスタジアムで聞いた歌はとても迫力があり、とても印象に残った。



< 平和公園 >

3 心に残ったこと

僕が印象に残ったことは、2つある。1つ目は、原爆資料館で見た原子爆弾のレプリカだ。原子爆弾は、中心温度は数百万度あり、爆心地で3,000～4,000℃、1km離れた場所でも1,800℃で秒速440m（時速1,584km）の速さで熱線が来た。そして当時住んでいた約24万人中7万3,000人以上が亡くなって、7万4,000人以上が大けがをすることになってしまったのだ。そして爆弾が落とされた近くにあった刑務所では134人が即死した。

2つ目は、平和祈念像だ。平和祈念像は、台座3.9m、像が9.7mある。この像には、強く逞しく平和を伝えたい、唯一無二である存在であってほしいという願いから、1955年に建立された。僕はこの像を見て、とても壮大で迫力のある像だと感じた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

僕にとって、この4日間はとても貴重な経験だった。80年前に原爆が落とされたとは思えない長崎の街の復興の様子を見た。私は、この世界が平和であり続けるために長崎を最後の被爆地にしようと訴え続けている先人たちに感謝しようと思った。今、被爆者の方々の平均年齢は86歳以上であり、世界には1万2,000発以上の核兵器がある。だからこそ僕たちは、80年前に長崎であった出来事を後世に伝え、核廃絶を伝えていかなければならぬと強く思った。

戦争なき世界へ



郡山市立守山中学校2年 二 瓶 瑞 基

1 派遣研修への参加に当たって

私が派遣事業に参加した主なきっかけとして、近年の世界では、紛争が多発していることがある。こうした紛争は、ニュースでも報道され、戦争が身近なものになりつつある。日本も戦争をしていた時期があり、広島と長崎に原爆が落とされたことも知っていた。そこで、「長崎の原爆投下での被害や、当時の人の想いを知ることができ、戦争の悲惨さや平和の尊さを再認識できるいい機会である」と考えた。

今年で、原爆投下から80年がたった。そんな長崎の現状に興味をもち、一本柱の鳥居や、大浦天主堂、グラバー園などの文化にも触れてみたいと思い、参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館では、熱線を受けた人の写真や長崎型原爆「ファットマン」の模型など1,500点以上の展示がされていた。どれも目をそらしたくなるような展示だった。私は、原爆の模型を見たとき、想像よりも一回り小さいなど感じた。しかし、原爆の威力は絶大で、73,884名の方が犠牲となり、74,909名の方が負傷した。原爆の威力の大きさに恐怖を感じた。アメリカ軍は原爆の威力の確認のため、当時長崎にあった軍需工場を破壊するために長崎に原爆を投下した。約14万人の方が無差別に被害にあったことが、私にはどうしても許せない。また、原爆を使用するようなことが日本でも、世界でも二度とあってはならないと強く思う瞬間でもあった。

(2) 青少年ピースフォーラム

ピースフォーラムは2日にわたって行われ

た。まず、被爆体験講話で三瀬清一朗さんの話を聴いた。三瀬さんは当時10歳で伊良林国民学校の5年生だったそうだ。爆心地から3.6kmの家内で被爆。家族全員無事だったが、家の中は惨憺たる有様で、後片付けに追われた。数日して、学校が気になり向かうと想像を絶する光景。瀕死の人や大火傷で運ばれてくる人が「水を、水を」と叫んでいた。そして苦しさのあまり「殺してくれ、殺してくれ」の声。感情が麻痺して、ただ立ち尽くして見るだけだったと三瀬さんは語っていた。講話の最後には、「平和とは、普通の暮らしができること。そして平和は人類共通の世界遺産です。」と結んだ。その言葉に改めて「平和」の大切さについて考え、三瀬さんの想いや原爆の恐ろしさを伝えていこうと決意した。

2日目は、日本各地の小中高生と「違うってどうゆうこと？違うって悪いこと？」について話し合った。違いによって起こるメリットやデメリットを出し合う中で、私は「違い」が原因で起こることや、分かち合い、助け合いのきっかけにもなることを深く考え気付くことができた。

(3) 平和祈念式典

私は平和祈念式典に参列するという大変貴重な体験をした。11時2分に原爆の被害で犠牲になった人たちに向けて黙とうを捧げた。その時、空の方からも平和を祈っているような気がした。原爆が落とされた影響で、3,000～4,000度あまりの熱線が放出され、多くの人が大火傷を負った。その人々が水を求めてさまよっている姿が脳裏をよぎり、胸が痛くなった。長崎が最後の被爆地になることを心から願っている。



< 平和祈念像 >

3 心に残ったこと

特に印象に残ったのは、平和公園を見学したときである。この上有る写真は平和祈念像である。平和祈念像は天に指した右手で原爆の脅威を、水平に伸ばした左手で平和を、そして軽く閉じた目で戦争犠牲者の冥福を祈るという3つの意味が込められている。また、制作者である北村西望さんは、「神の愛と仏の慈悲」を象徴して、平和祈念像を制作した。そして台座の裏には、「右手は原爆を示し、左手は平和を。顔は戦争犠牲者の冥福を祈る。是人種を超えた人間。時に仏時に神。」このことを聴いた私は、この像が表現している意味を深く理解することができ、とても感銘を受けた。

たった一瞬で一つの都市を壊滅状態にまでした原爆。この日本の広島と長崎にそれが落とされると誰が想像したことか。多くの建物が吹き飛び、多くの尊い命が奪われ平和を日常から遠ざける。こうした戦争はもう二度としてはいけないものだと思う。そのため、私たちが責任をもって「戦争は起こしてはならないもの」「平和な世界をこれからも築いていく」ことを伝え、広めていかなければと考えた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は今回の4日間の派遣事業を通して考えを改めたことがある。それは、「平和とは何なのか」「命の尊さ」である。被爆体験講話で三瀬さんの話を聴き、普通の暮らしができることが何よりの幸せなのだとと思った。戦争ではお腹いっぱいに食べることができなくなり、男性は戦地に向かい、女性は工場で働くようになる。私は現代の平和な日本に生まれたことに感謝するしかない。しかし、世界では戦争、紛争が絶えない。代表的なのが中東で起きているパレスチナ紛争や、2022年からのロシアによるウクライナ侵攻だ。そういう戦地では、次々と人々が亡くなり、捕虜として敵国に連れていかれている。このことはニュースで度々報道されているところだ。正直なところ、私は戦争関連のニュースが嫌いである。なぜなら銃や爆弾で亡くなったり負傷したりするのを想像してしまい、胸が張り裂けそうになるからである。この先、そういうニュースが報道されないように、全世界で平和について一人ひとりが深く考え、「戦争が起こらない誰もが楽しい世界」になってほしい。そのためにも私がこの派遣事業で感じたことをこれから広めていかなくてはいけないと実感した。この長崎派遣研修で、とても貴重な体験ができたことに感謝したい。

3つ目の爆心地を作らないために



郡山市立高瀬中学校2年 遠藤 望央

1 派遣研修への参加に当たって

私は今まで、長崎で起きたことや原爆について深く考えたことはなかったが、長崎派遣事業があることを知り、まずはインターネットで戦争や原爆について色々調べてみる事にした。すると戦争や原爆の恐ろしさ、原爆の影響で悲惨な状況だったことや今でも原爆により苦しんでいる人達がいることが分かった。被爆者の悲しみや苦しみ、辛さは長崎に行ってみればさらに感じることができるよと家族に言われた。また、母方の曾祖父が広島で被爆していたこともあり、長崎に行って原爆資料館、世界平和の願いを込めて作られた平和公園などに行き、当時のことをさらに深く知りたいと思い派遣研修に参加することにした。

2 派遣研修に参加して

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井博士は、長崎県で放射線医学の研究や患者の診察をしていた人だ。原爆が投下された日、永井博士も怪我をしたが応急処置を行い、他の人々の救助を行った。永井博士には子供2人と奥さんがいて子供は無事だったが、奥さんは原爆で亡くなってしまった。その後、放射線医学の研究で長年放射線を浴びていたことから発症した白血病が悪化し、寝たきりの生活が始まってしまった。そんな永井博士のために、浦上の人々が原爆で無一文になったのにも関わらず、住む家を建ててくれた。寝たきりでも書くことはできたため、永井博士はたくさんの小説などを書いて数々の名作を生み出した。「己の如く隣人を愛せよ」という意味を込めて、畳2畳ほどのこの建物を如己堂と名付けた。奥さんが亡くなり、自分が白血病にかかって寝たきりの生

活になったが、諦めず自分にできることをしたことがすごいなと思った。私が永井博士の立場だったら、大切な人を亡くした苦しみで立ち直れなくなり、いろんなことを諦めてしまうと思う。

(2) 青少年フォーラム 被爆体験講話

青少年ピースフォーラム1日目では、被爆者の三瀬清一朗さんのお話を聞いた。当時、10歳で爆心地から3.6km離れた屋内で被爆した。原爆が投下されてからしばらくして、音がしなくなったため目を開けると、想像を絶する光景が目に入ってきたそうだ。数日後、小学校へ向かうと学校は救護所となり、ひどい火傷を負っている人や血だらけの人がたくさん運ばれてきた。亡くなった人を、校庭で焼いている所を嫌というほど見せられたそうだ。長い年月が経った後も、原爆の被害による苦しみが続いた。原爆が投下された日に降った黒い雨は、放射線を含んでいるので、生き残った人でも黒い雨に打たれた人は吐き気、髪の毛が抜けてしまう脱毛、がんや白血病などを発症すると言われ、放射線により亡くなったり多くの人がいるだろう。また、放射線を浴びたことによって差別があったことを知った。原爆の被害はずっと続いてしまうものだと思うと、やっぱり悲しく、恐ろしいもので、必ずこの世界から無くさなければいけない。

(3) 平和祈念式典

80年前の長崎に原爆が落とされた日は8月9日。毎年平和祈念式典が行われる。長崎市長の長崎平和宣言や被爆者代表の方のお話、合唱などを聞き、献花・献水をして11時02分には1分間の黙祷を捧げた。献水は水を求めて亡くなった方々が多くいたため、そういった方々を慰靈するための儀式である。



＜山王神社のクスノキ＞

特に心に残ったのが被爆者合唱だ。被爆の方々が歌われたのは「もう二度と」という曲で、私たちのような被爆者をもう二度とつくれないでという強い思いがこもった合唱だった。原爆の被害や悲惨さを伝えてくれている被爆者の平均年齢が86歳となってしまった。私たちが長崎に派遣されている重大な意味を気付かせてくれるものだった。

3 心に残ったこと

4日間の派遣研修の中で一番心に残ったのは、山王神社のクスノキだ。爆心地から、約800m離れた場所にある2本のクスノキは被爆樹木である。原爆の被害によって枝や葉が吹き飛ばされ、黒焦げの太い幹だけが残った。もう70年以上草木も生えないだろうと言われた長崎だったが、このクスノキは被爆した日から約2ヶ月で芽が生えてきた。その後も順調に回復し、数年かけて葉の生い茂るクスノキへとなっていた。この木の幹の内部には、原爆による被害や樹齢によってできた空洞があり、その中には石も入っていた。クスノキは長崎原爆の被害を伝える大切なシンボルとなっている。植物

の生命力はすごいものだと改めて感じると共に、私もこのクスノキのようにどんな状況であっても前を向いて生きていきたいと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣事業を通して、戦争や核兵器についてたくさん学ぶことができた。被爆の方のお話を直接聞くことができ、より長崎で起こった悲惨な出来事や苦しみ、恐ろしさが分かった。

原爆は爆風・熱風・放射線という3つのエネルギーが生じ大きな被害をもたらす。そんな原爆は今も存在している。現在9カ国が核兵器を所持し、使うことができる核弾頭は約9,600発ある。核兵器が無くならない理由は、核兵器を所持し続ける事で脅威となり、戦争が起きないからだ。でも、所持するということは使う可能性があるということ、それは本当に平和で安全な世界と言えるのだろうか。私たちは長崎や広島の原爆による悲劇をたくさんの人々に伝え、これからも平和を維持し守らなくてはいけない。『平和は人類共通の世界遺産』なのだから。

過去の過ちを未来に生かす



郡山市立郡山第一中学校2年 前澤 勇羽

1 派遣研修への参加に当たって

私が長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは「はだしのゲン」を読んだことだった。これを読み、戦争の恐ろしさに衝撃を受けた。今まで戦争がないことが当たり前で平和について深く考えたことはなかった。かつて日本が戦争をし、核爆弾が落とされたという悲しい過去を持っていることについて今一度見直し、その教訓を未来に伝えていきたいと思った。平和な暮らしが当たり前だと感じている今こそ戦争や核兵器について知り、戦争は絶対にしてはいけないということを胸に刻むことが大切だと考えた。そのために今回の活動を通して戦争や核兵器の恐ろしさを実際に見て、平和である幸せを身を持って感じたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

ここでは原子爆弾の脅威がよく伝わってきた。どの資料も胸の苦しくなるものばかりだった。たった一個の原子爆弾が人の人生を「無」に変えてしまうことを考えるとゾッとする。長崎の人々は8月9日にいつも通りの毎日が突然なくなってしまうとは考えてはなかっただろう。一瞬ですべてを失ったのだ。辛かっただろうな、悲しかっただろうな、と資料の写真ごとにひしひしと伝わってきた。焼け野原になってしまった町や被爆者の方の怪我などの写真を見て胸がキリキリと痛んだ。私は原子爆弾について知識として理解していたが、これほどにも残酷な兵器なのだと知らなかった。もう二度とこのような悲惨なことが起こらないよう、少しでも早く核兵器廃絶が達成されることを強く願った。

(2) 平和祈念式典

今日で長崎原爆投下から80年を迎える。この日は朝から声や物音が聞きづらいほどの大雪だった。なぜだろうと考えたとき、ふと頭によぎったのだ。この雪は天国にいる被爆犠牲の方々が泣いているのだと。この涙は日本の平和が80年続いた安心と今後の戦争への懸念を思って流しているのだろうと思った。しかもこの雪は式典が始まった途端に止んだのだ。これは被爆犠牲の方々が式典の様子を静かに見守っていたのだろうと思った。平和や核兵器廃絶を願って。

被爆者の方々が亡くなつてもなお、世界に平和を訴えようとする強い思いがその日の天気からよく伝わってくるようだった。私は長崎市長の長崎平和宣言にのせた思いが少しでも世界各国に広がり、人の心に響いて核兵器廃絶や世界恒久平和につながってほしいと思った。そして11時2分、黙祷の際、「被爆された方々が安心して眠りにつけるよう、私たちは戦争のない平和を目指すため、今自分ができることを見つけて少しでも世界恒久平和に貢献します。」と誓った。この式典に参列して「戦争という重罪はなにをしても償えるものはない。失ったものはかえってこない。」という恐ろしい事実と「今後は私たちがこの思いのバトンを後世に渡す。」という重要な使命を感じた。

(3) NHK長崎「クスノキ 2025」

長崎での最後の夜。福山雅治さんと「クスノキ」と「虹」を歌った。会場全体がなんともいえない一体感になり、福山さんと一緒にになって歌えていることに私は感動した。そしてこの時間は一生の思い出に残る素晴らしいものになった。「クスノキ」という曲は福山さんが作曲した。



＜たくましい生命力を持つクスノキ＞

被爆樹木であるクスノキ視点で「生命の尊さ、たくましさ」や「全ての生命が等しく生きられる世界への願い」を込めた楽曲である。このメッセージがのせられた歌詞は人の心に響き、私はこの曲が宝物になった。私はこの曲が被爆樹木クスノキとともにこれからも一生生きていてほしいと思った。この曲のメッセージが全世界に響き渡ることを願って。

3 心に残ったこと

特に私の中で心に残ったことは山王神社のクスノキである。そのクスノキは原子爆弾落下中心地から約800mしか離れておらず、原爆の爆風や熱線をもろに浴びた。原爆投下後、このクスノキは枝や葉を吹き飛ばされ、黒焦げの幹だけしか残らず、あたかも死んでしまったかのような状態だった。長崎はこれから70年草木も生えないと言われていた。しかし、原爆投下から2ヶ月後には芽が始めたのだ。実際にクスノキを拝見し、原爆を受けてもなお、決して朽ちず倒れず、生き生きとした生命力に圧倒されてしまった。このようなクスノキを見た人々は生きる勇気や希望をもらい一生懸命生きようと考えたであろう。クスノキの生命力に助けられた人も少なくないはずだ。そんなクスノキをこれからも自分たちの手で守っていきたい。そしてこのクスノキに起きた出来事を原爆の脅威として世界に訴えていきたい。私もクスノキの

ようにどんなに打ちのめされようと前を向いて生きていきたいと強く思った。それと同時にもう二度とこんな戦争をしてはいけないと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回この長崎派遣事業に参加して本当によかったですと思っている。この4日間を通して今まで以上に成長できたと感じている。仲間との出会いや核兵器への理解など、一つひとつの出来事に思い出が詰まっている。

私は青少年ピースフォーラムの意見交換でそれぞれの「違い」を互いに認め合うことが大切だと思うようになった。「違い」というものはとても身近なもので、家族や友達と私は違う。さらに、国際的に見れば文化や国、経済もすべてに「違い」がある。「違い」があるからこそ豊かな考えが生まれる。しかしその「違い」によるすれ違いも生じる。このすれ違いが、紛争や戦争のきっかけになってしまう。だからお互いの「違い」を認め合うことが戦争をなくす一步になるのではと考えた。少し難しいが自分たちで「違い」のマイナス面をプラスにしていくよう今回学んできたことを一人でも多くの方々に伝え、私たちがリードしていきたい。

このような貴重な経験と時間をくださった長崎派遣事業の関係者の皆様にとても感謝している。

長崎派遣事業に参加して



郡山市立郡山第二中学校2年 根 本 瑛 多

1 派遣研修への参加に当たって

私は、小学生の時に中央公民館で開催されていた長崎派遣事業のパネル展を見に行つたことがある。原爆爆裂によってできたキノコ雲や戦争で焼かれた町の写真を実際に見て、原爆の恐ろしさに体が震えた。

核兵器は、多くの人間の尊い命を一瞬にして奪うとても恐ろしいものであり、戦争や核兵器の無い平和な世界の重要性を再認識するため、唯一の被爆国である日本の当時の様子や、その底の状態からどのように復興していくのかなどを、実際に現地に行って自分の目で確認するために参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆記念館は、医師であり作家でもあった永井博士の生涯と業績を伝える施設である。永井博士は、自身が白血病で「余命3年」と診断され、その2か月後の8月9日の原爆投下により被爆している。その原爆によって妻を亡くし、自身も重傷を負いながらも、被爆者の救護活動を献身的に行つた人物である。重い白血病を患いながらも「被爆者を一人でも多く助けて、最後まで人の為に尽くしたい」という強い想いで、原爆の悲惨さや平和への願いを17冊の本に収めた。私も永井博士のように、永久平和のために貢献できる人になるべきだと思った。

(2) 山王神社

山王神社は、爆心地から約800m離れた場所に位置し、原爆爆裂により壊滅的な被害を受けた。山王神社には樹齢500～600年、高さ約22m、幹周り約8mの大きなクスノキがあ

る。爆風によって飛んできたガラス片や瓦や石が突き刺さったままその堂々とした姿を見せており、力強い生命力と長崎復興までの経緯を全て知っている魂を感じた。専門家からは「約70年はこの近隣では植物は生育しないだろう」と予想されていたが、現在はたくさんの植物が生き生きと成長している。また、山王神社には、原爆の被害を受け片方の柱が倒壊したが、片足のまま80年間立ち続けている一本柱鳥居がある。この二つの復興のシンボルを目の前にした時、原爆の恐ろしさ、悲惨さを感じると共に、長崎の復興を見守り続けるその姿は、まるで子どもの成長を願い、深い愛情で温かく見守る親のような存在に感じた。

(3) 平和祈念式典

私は8月9日、平和祈念式典に参列した。この式典は長崎市長をはじめ石破總理、94か国の代表、被爆者や遺族が参列した。その中でも心に残ったのは長崎市長による平和宣言だ。「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」という被爆者の想いの結晶からは「核兵器廃絶の必要性」や「人間の命の尊さ」、「平和である事の重要性」が強く伝わってきた。11時2分の黙とうでは当時の様子を想像しながら被爆者への想いを込めた。同じことを二度と繰り返してはいけない、同じ想いをする人を作つてはいけない、と。



<被爆によりゆがんだ鉄柱>

3 心に残ったこと

この写真は、原爆資料館で見た、被爆によりゆがんでしまった鉄柱である。この鉄柱が元々どんな色だったのかは分からぬが、爆風により茶色になり、鉄柱のゆがみ具合から、当時の原爆の威力の大きさ、当時の被害状況の悲惨な様子が伝わってきた。爆心地から 1 km 以内の全てのものが一瞬にして灰になり、放射性物質が含まれた爆風で吹き飛ばされたと思うと、とても恐ろしく感じられ、心に残った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

朝穏やかに目を覚まし、学校で授業を受け、部活に取り組み、帰宅する。私はこの派遣研修に行くまでは、そんな平和な毎日が当たり前のことだと思っていた。しかし、戦争が起これば、その生活は一瞬にして変わってしまう。長崎で当時の様子を目の当たりにしたこと、「平和の重要性(戦争の悲惨さ)」や「人間の命の尊さ」を再認識した。さらに、ロシアのウクライナ侵攻やパレスチナ・イスラエル紛争などもあった

ことから、私たちが平和でいられることは当たり前のことではないと感じ、日々平和でいられることに感謝しながら生活していくなければいけないと思った。また、平和祈念式典に参列して、被爆された方々による核兵器廃絶を訴える合唱や平和への願いのこもった平和宣言から、「戦争の無い世界(世界平和)」と「核兵器廃絶」が世界的な課題であり、それを解決していくことが私たちの使命だと感じた。

現在、世界に存在する現役核弾頭は約 9,600 個ある。これらの原爆は当時の数千倍の威力を持つと言われており、戦争で核兵器が使用されれば地球滅亡の危機にさらされてしまう。被爆者の平均年齢が 86 歳を超えた今、一人ひとりが「平和の重要性」や「人間の命の尊さ」、「戦争の悲惨さ」を認識し、私たち若い世代が当時のことについて後世に伝えていくべきだと強く感じた。そのために、私は友達や家族に伝えていきたい。世界中から戦争や核兵器が無くなり、世界平和が訪れるることを願って。

長崎での派遣研修を通して



郡山市立郡山第三中学校2年 堀川かなえ

1 派遣研修への参加に当たって

「米軍による原爆投下から、今年で…」、ニュースや新聞、学校でも、今まで多く見聞きしてきた長崎や広島への原子爆弾投下だが、私が初めてこのことについて勉強したのは、小学5年生の時だった。当時は、あまりに残酷すぎる事実に言葉を失った。「悲しい」「恐ろしい」という強い印象を受けたのと同時に、原爆や被爆の様子、そしてその後の、人々への影響などについて詳しく知りたいと思った。そして、「戦争」や「平和」について、きちんと知り、考えなければいけないと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 山王神社

山王神社は、「被爆クスノキ」や「一本柱鳥居」で有名な長崎市坂本に鎮座する神社である。特に、一本柱鳥居と呼ばれ親しまれている山王神社の二の鳥居は、爆心地から約800mしか離れていなかったにも関わらず、奇跡的に片方の柱が残った。

一本柱鳥居は、その名の通り右半分の柱だけで立っている。原爆爆発により秒速200mの爆風が鳥居を襲い、左半分は吹き飛ばされてしまった。なお、現在残っている柱は爆風等の影響で傾いているそうだ。また、3,000～4,000度の熱線の影響で、鳥居に刻まれた寄進者の名前は溶けて見えなくなっていた。これらから、原爆の威力や恐ろしさを知ると共に、その後も立ち続ける一本柱鳥居の力強さを感じることができた。

(2) 原爆資料館

原爆資料館は、被爆の惨状や原爆が投下されるに至った経過、平和希求など様々な展示を

行っている施設であり、平和について深く学ぶことができる場所である。

原爆が炸裂してから被害が広がっていく地理的な様子、人々の当時の状況など、実際に残った物や写真、手記を通して、原爆の怖さを目の当たりにした。あまりの恐ろしさに目を背けたくなるほどでもあった。

今回の研修の中で特に深い学びができた場所であり、原爆の恐ろしさや平和の尊さを知り、実感することができた。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、全国から派遣される平和使節団の青少年と長崎の青少年が、一緒に被爆の実相や平和の尊さを学ぶイベントであり、毎年8月9日に平和祈念式典が行われている。

被爆した方のお話を聞いて、当時の生活の苦しさや原爆の悲惨さ、残酷さを感じた。また、今、平和に生活できることへの感謝とともに、原爆投下による事実を後世に伝えていくことの重要性を知ることができた。

平和学習では、「違い」について自分たちの意見を交換し合った。違いとはどんな事？それがあることにより起こる良いこと・悪いことは？などの議題を通して、新たな気付きや、あらためて実感する事が多くあった。その中でも特に面白く、大きな気付くなったりした議題は、「それぞれ持っている意見は違うのに、どうして私たちは話し合いをできているのか」である。普段は特に気にしておらず、当たり前にできていたことだったため、この議題が出されたときは少し驚いた。だが、この議題を通して、「お互いの違いを認め合うことが、平和な世の中をつくる第一歩になる」という考えを持つことができ



＜平和の泉 少女の手記＞

た。世界中の人々が相互理解の心を持っていたら、争いは起きないのかもしれない。

3 心に残ったこと

上の写真は、長崎平和公園にある、原爆投下時に9歳の少女だった山口幸子さんの手記が刻まれた「平和の泉」の石碑だ。

この石碑に刻まれた言葉から、当時の惨状が痛いほど伝わってくる。油の浮いている水はきれいではないのだから当然飲んではいけない。でも、きれいな水などなく、のどは一向に渴くばかり、そのつらさに耐えきれず、油の浮いた水を飲むことを選んだ。そうするしかなかつた。そんな、辛く、苦しい思いを常にしていたことを考えると、今、私たちが、いつでも、安心してきれいな水を飲むことができるということが、どんなに貴重で、当たり前ではないことなのかを実感した。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、4日間の派遣研修を通して戦争、特に原爆の恐ろしさ、悲惨さを肌で感じることができた。そして、普通に生活できることの素晴らしさと平和の尊さを学ぶことができた。

研修に行く前は、長崎と広島に原爆が投下されたということや被爆した人がいたということしか知らなかった。被爆がどんなにたいへんなことなのか、原爆投下という事実を後世に伝えなければいけないことなのかというところまで

理解が及んでいなかった。

今回の研修参加にあたり、事前学習などで原爆の恐ろしさについて学んではいたものの、実際に現地に行って建物や資料、被爆した人から話を聞くと、原爆に対する怖さや、その被害の悲惨さを実感することができた。現実は、今まで見聞きしていたことよりもはるかに残酷で、「辛い」「苦しい」では表現できないほど悲惨なものであった。

爆心地周辺は一瞬で焼け野原となり、人間は灰と化してしまう。また、生き残ったとしても熱線により皮膚は溶け、水を求めて何百人の人が川に飛び込み、亡くなった。あまりの苦しさに「殺してくれ」と叫ぶ人もいたという。その後も、被ばくによる影響を恐れる日々。そのような事実を研修で現実の事として深く知ることができた。

今回の研修で学んだこれらの事実は、家族や友人たちに伝えなければいけないと思うと同時に、現在、世界にある核兵器の数について考えた。世界では核廃絶が叫ばれているが、現役核弾頭の数は年々増加しているという。これは、たいへん恐ろしいことだと思う。

今回の派遣研修を通して学んだ「戦争の悲惨さ」「原爆の恐ろしさ」、そして「平和の素晴らしさ・尊さ」を改めて心に刻むとともに、今回の貴重な経験を今後の生活に活かしていきたい。

平和な世界を目指すため



郡山市立郡山第四中学校2年 中 原 晴 来

1 派遣研修への参加に当たって

私が、長崎派遣事業に参加したいと思った理由は、私自身、原爆は広島と長崎に投下され、たくさんの命を奪ったものということしか知らず、この事業に参加することが詳しく学ぶ良い機会になると思ったからである。また、私は、最近よく世界各地で戦争や紛争が起きていることを耳にしている。戦争について関心が高まり、「なぜ戦争は、多くの命を奪う悲惨なことなのに繰り返されるのか」という問い合わせに対し、深く考える機会になると思い、参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 山王神社

山王神社には一の鳥居から四の鳥居や、被爆したクスノキがあった。爆心地から約800mの距離だったため、すさまじい爆風と熱線により一の鳥居と二の鳥居以外の鳥居はすべて倒壊した。一の鳥居は交通事故により倒壊してしまったが、二の鳥居は左半分が吹き飛ばされたものの右半分は残り、一本柱の状態になった。そんな状態になっても立ち続けている姿に圧倒されると共に爆風の威力の凄まじさを感じた。また、クスノキは枝や葉が吹き飛ばされ、黒く焦げた太い幹は裂けてしまった。しかし、被爆から二か月後には新芽を出し、今では青々と葉は茂り、幹は力強く伸びている。その姿に強い生命力とたくましさを感じた。被爆したクスノキには原爆による傷や補修の跡、幹の中にはたくさんの石が入っていた。その痛ましい姿はとても印象的だった。一本柱鳥居と被爆クスノキは原爆投下後の長崎の人々に勇気と希望を与える、今でも親しまれている。

(2) 長崎原爆資料館

ここには、長崎に投下された原爆「ファットマン」の実物大の模型、熱線により表面が沸騰した瓦、ガラスと手の骨が一体化したものなど、一つ一つの展示物に衝撃を受けた。私は原爆爆発直後の時刻11時2分で止まった時計が特に印象に残った。この一瞬に町の建物が破壊され、家族を失い、怪我や火傷を負い苦しむ人々は、どれほどのつらい思いをしたのか、考えるだけで悲しい気持ちになった。他には、ファットマンの模型が印象に残った。大きさは長さが約3m、直径が約1.5mの爆弾一つで、たくさんの命が奪われた。それでも現代の核兵器は長崎に投下された原爆より威力が上回っていると説明され、背筋が凍るような思いになった。そして、核兵器廃絶の必要性を強く感じた。

(3) 青少年ピースフォーラム

8月8日、9日の二日間で行われ、全国各地から様々な小中高生と大学生が集まり、平和の尊さを学び交流を行った。私はその中で被爆者の三瀬清一朗さんの被爆体験講話がとても印象的だった。当時、三瀬さんは10歳で爆心地から3.6kmの屋内で被爆したが三瀬さんと家族は無事だった。原爆投下後の学校は救護所となり、怪我人が運ばれた。次々と亡くなり、校庭で焼かれた。私は胸が締め付けられた。苦しみながら亡くなっている人々の状況は想像を絶する残酷さだったと思う。三瀬さんは「知識ではなく経験者の生の声を聞いてほしい」と話していた。知識だけでは伝わらない当時の生々しさを痛切に感じるとともに、今の私たちが当たり前の生活が出来ていることがどれほど幸せなのか痛感した。私は平和への重要性について考えるとても貴重な体験になった。



< 平和祈念像 >

3 心に残ったこと

この写真は平和祈念像である。この像の左手は平和、右手は原爆の脅威、軽く閉じた目は戦争犠牲者の冥福を祈るという意味がある。平和を願う想いが込められていると感じた。そしてこの像の前で平和祈念式典が行われた。8月9日の11時2分に黙とうが始まり、80年前の長崎に同じ日、同じ時間に原爆が炸裂した。約7万4千人が命を落とした。私は同じ過ちが起きないように強く願った。その後の長崎市長の長崎平和宣言では、「地球市民」という言葉があった。地球市民とは人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つの住民として平和な未来を築いていこうとする人々のことである。市長は「たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば未来を切り拓く大きな力になります。」と言っていた。その言葉からは、核兵器廃絶と平和への思いが強く伝わってきた。私は、地球市民として人々との交流と対話を重ねることは、平和への一歩になると思った。長崎の人々は、被爆の絶望の中でもあきらめずに見事復興した。その生きる強さに私は感銘を受けた。平和は人々の努力の積み重ねからできていると思う。私は、平和を築くためには、平和の尊さを語り継ぐことが大切だと学んだ。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣事業の4日間は、戦争や原爆の恐ろしさや平和の尊さなど様々なことを学び深く考えさせられた。研修中は特に原爆と平和について触れることが多かった。原爆は多くの死傷者を出し、建物などに大きな被害を与えただけでなく、後遺症や病気になり、今でも苦しめられている人がいることを知った。長崎はこのことから核兵器廃絶と平和を目指すために努力しているのだと強く感じた。私は長崎を実際に訪れ、見て聞いて感じたことでたくさんの知識を得られた。4日間はあっという間だったが、仲間と協力して学ぶことは自分自身大きな成長になったと思う。そして私は、戦争の恐ろしさや命の尊さを次の世代に受け継がなければいけないと思う。被爆者は年々高齢化が進み、被爆経験などを次の世代に受け継ぐことが大きな課題になっている。被爆者の方の経験を受け継ぐことは、平和への願いや核兵器廃絶を実現するために必要な行動である。長崎市長が言っていた言葉のように一人ひとりが小さな力でも行動することが平和への一歩につながると改めて思った。今回学んだこと、被爆者の話をたくさんの人々に伝えることが私のできる使命だと思う。

「戦争」とは



郡山市立郡山第五中学校2年 藤田 奏

1 派遣研修への参加に当たって

血が流れるような映像が苦手な私は、「戦争＝恐怖」という意識が強く、これまでずっと目を背けてきた。今回、長崎派遣の話を先生からいただき、自分の恐怖感が増大してしまうのではないかと思う反面、「ただ怖いだけの戦争」ではなく、「本当の戦争」について学び、理解することで私の戦争についての意識を変化させることができるのでないかと思った。そこで、戦争や原爆における実際の被害や被害を受けた人々の思いを深く知りたいと思い、参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和祈念式典

8月9日に行われた平和祈念式典で長崎市長が述べた長崎平和宣言の中に「地球市民」という言葉があった。「この言葉には、人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。」と述べられていた。

これらの言葉を熱く語った長崎市長に心を動かされない人はいないと思った。

私と同じ地球市民である世界中の人々に、自分の家族のため、まちの平和のために、すぐに核兵器廃絶に取り組んでほしいと思った。

(2) 被爆体験講話

被爆当時10歳だった三瀬清一朗さんのお話を聞いた。爆心地から3.6km離れた家の中で被爆したが、家族8人全員無事だった。

2学期始めの出席を取るとき、1人欠席の人がいた。この方は原爆で亡くなられた方だった。三瀬さんは「クラスメイトを戦争で亡くしたの

が悔しかった。」と話していた。10歳で戦争や原爆で友だちを亡くすことは想像できないほど辛いことだと思った。こんな未来ある子どもさえ奪ってしまう戦争や原爆による惨禍は二度と繰り返してはならないと思った。

また、三瀬さんは講話の最後に「平和は人類共通の世界遺産です。」と述べていた。本当にその通りだと私は思った。1日も早く世界中に平和な日が訪れる事を願っている。

(3) 戦争の疑似体験

大切な人、物、場所をカードに書いて空襲が起きたたびに、大切なものが少しずつ減っていくというカードゲームを通して戦争の体験をした。

「大切な人」のカードの1枚に「父」を書いたが、空襲警報が鳴り、徴兵制度が出されて、そのカードを手放さなければならなかった。父以外の母や弟のカードはすべてそろっているのに、父のカードを手放したこと寂しい気がした。何度かの空襲警報の後、最終的に手元に残ったのは、「自分」、「祖母」、「家」のカードだった。こうやって、大切なものを一つひとつ失っていくのが戦争なのだと疑似体験を通して深く知ることができた。



＜残り続ける熱線の跡＞

3 心に残ったこと

この写真は今でも残っている山王神社の階段が被爆した証拠である。

爆心地から約800m離れた山王神社では放射線の影響はなかったが、落下中心地と同じような熱線を浴びた。

有名な「山王神社の一本柱鳥居」は爆風で片側は倒壊。もう片側は今もそのまま残っているものの、爆風により位置がずれてしまっていたり、文字は熱線で溶けて読めなくなったりしてしまっていた。また、階段には原爆爆発時に受けた熱線が、今でも色を付けて残っていた。

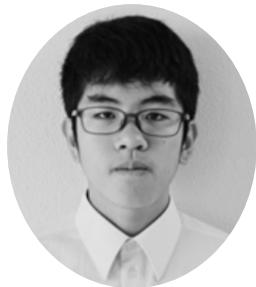
これを見たとき長崎の原爆というのは私にとって「歴史上にあったもの」、「教科書に載っているもの」という自分からは遠い存在だったが、一気に身近に感じて怖くなった。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の研修を通して「戦争」について考え直すことができた。「怖いから目を背ける」のではなく、「怖いから二度と繰り返さないために学ぶ」ことが大切だと思った。しかし、私には戦争を始める権限もやめる権限もない。それでも「戦争はたくさんの犠牲者を出し、戦時中において良いことは一つもない」という考えの人が世界中で多数派になれば、戦争は起こらないし、なくなるのではないかと思った。

世界に存在する核兵器は約1万発。様々な国が長崎に落とされた原爆に比べて、より威力の強い核兵器をたくさん持っている。世界で唯一の被爆国である日本は、積極的に核兵器廃絶に向けて行動しなければならない。その中で私は、できるだけ多くの人に今回学んだことを伝えなければならないと思った。

私が学んだ「平和」



郡山市立郡山第六中学校2年 和田 暖仁

1 派遣研修への参加に当たって

今、世界中で戦争や紛争が起きている。ニュースなどで情報を知るたびに「平和とは何か」と考えていた。今年は戦後80年だ。メディアなどで戦争の記事を目にすることも増え、以前と比べて平和への興味が大きかった。また、先生からの推薦もあり、平和のことを知る大きな機会なのだから行ってみようと思って参加を決めた。

研修前は、戦争の話について行けるのか、また、違う学校の人達と4日間仲良く過ごせるのかなどの不安もあったが、勇気を出し、自分を信じて参加した。

この長崎派遣で自分に課した課題は3つ。「今、知っていることよりも少しでも多くのことを学ぶ」「現地でしか体験できないことを通して理解を深める」「学校の代表としての責任と自覚を持って行動する」私はこの3つを胸に掲げて研修に臨んだ。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和祈念式典

私は初めて平和祈念式典に参列した。その前日まで、たくさんの原爆に関する施設や展示を見てきたので、平和への気持ちが高まっていた。

平和祈念式典は毎年8月9日に長崎で行われる「原爆による犠牲者を慰靈し、世界の恒久平和を祈って挙行される式典」だ。

いざ参列すると、なんと心に響く式典だろうか。心の底からの訴えが刻み込まれるように届く。届く度に戦争の残酷さと平和の大切さがより感じられる。特に印象に残ったのは長崎市長のスピーチだ。力強い口調で平和の尊さを訴えていた。核兵器廃絶の必要性、「地球市民」の

視点の大切さ、世界恒久平和の実現など、この世界の一人ひとりが考えるべき大切なことにあふれていた。

(2) 如己堂

8月7日に私たちは如己堂を見学した。如己堂とは、自らも被爆しながら被爆者の救護に当たり、戦後、原爆に関する本も書いた医師の永井隆博士が生前住んでいた建物である。如己の語源は、「如己愛人（己の如く人を愛せよ）」からきている。

博士は原爆で自身が被爆したにも関わらず、大勢の人々を救護した。また、17冊の本も書き上げ、平和の大切さを今でも大勢の人々の心に届けている。信じられないくらい辛い経験をしても、誰かを助け、後世にこの経験を伝えた博士の生き様に感動した。原爆で妻を亡くしても、重傷を負っても、寝たきりになっても平和を訴え続けた永井博士。きっと私だったら自分のことで精一杯だろう。

自分が辛くても、人のためを思って行動を起こした永井隆博士の想いに触れることができたひとときだった。

(3) 出島

長崎の歴史は原子爆弾などの戦争の歴史だけではない。長崎は古代から続く海外との交流の町だった。

私は1日目に出島を見学した。出島とは、日本が鎖国をしていた時代に開かれていた西欧との窓口となった場所だ。学校の授業で学んだ場所を歩いているのは非常に感慨深かった。実際に歩いて見学することで、鎖国時代の貿易についてより深く学ぶことができた。教科書に出てくる場所を見学し、学ぶことができたのは非常に良い経験だった。



＜伝える命＞

3 心に残ったこと

私が1番心に残ったのは山王神社の被爆クスノキだ。このクスノキは原爆によって被爆しており、1度は枯れかけたものの、また芽を出し、今では大きなクスノキになっている。このクスノキの内部には原爆が炸裂した際に飛んできたがれきや石が未だに残っている。このクスノキを見たとき、「原爆」というものが生々しく感じられた。80年前のあの日にめり込んだがれき、あの悲惨な様子も見ていた木の幹、そしてまた芽を出し大きくなったクスノキなど、一つひとつが「本当にあったんだよ」と語りかけてくるようだった。

また、8月9日にはハピネスアリーナにて福山雅治さんの「クスノキ 2025」を観覧した。長崎派遣へ行く前も聴いてはいたが、実際の山王神社のクスノキを見てから聴くのとでは感じ方が全く違った。また、福山さんの想いもダイレクトに伝わってきた。生で聴くと歌に込められた気持ちがこれでもかというくらいに伝わってきた。そして、今、このように「クスノキ」をつくった本人の歌唱で聴くことができるのも平和になったからだと思う。平和や戦争について改めて考えるきっかけになった。

戦争が実際にあったことを忘れてはいけない、そして今ある平和がどれだけ大切かということを実感した。とても貴重な良い経験をすることことができた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

この派遣事業に参加して、私の平和への考え方 180 度変わった。昔、戦争があって、原爆が広島と長崎に落とされたということを知つてはいたが、実際にあの時に被爆したものを見て、あの時に悲惨な状況だった場所を歩くことで、本当に原爆はこの場所に落とされて甚大な被害を及ぼしたということを改めて実感した。

何があったか知るだけではなく、実際にその場に行ってみることで感じ取ることができるものがある、その場に行くことでより深いことを知ることができる、そして当たり前の日常を過ごすことが平和であることなど、この研修では数え切れないほどたくさん学ぶことができた。

1発の原子爆弾によって長崎では7万3,000人以上の方が亡くなった。後に放射線の被害で亡くなった方も大勢いる。「あのとき何があったのか」を知ることが平和への第一歩だとこの研修に参加して感じた。そして、自分が学んだことを誰かに伝えて平和の輪を広げていくことも大事だと考えた。

私はこの研修で、原爆の悲惨さや平和の大切さを学ぶことが出来た。次は今回学んだことを誰かに伝え、平和な世界をつくっていきたいと思う。

「平和」はいつもの当たり前の生活。「平和は今、この瞬間だ。」と言える日々が毎日続くことを願う。

過去を遡り、未来へ



郡山市立郡山第七中学校2年 本間陽菜

1 派遣研修への参加に当たって

今この瞬間にも、どこかで誰かが戦争によって命を落としている。凄惨な兵器が使われ、多くの人の命が奪われる現状に、どうしても目を背けてしまう。「どうして世界はこんなに残酷な歴史を繰り返してしまうのだろうか。」そう疑問に思っていた。それに、平和の意味や命の尊さについて、自分なりに答えを出してみたいと思った。

そこで、第二次世界大戦にて原子爆弾を投下された地、長崎を訪れ、当時どんなことが起こっていたのか、原子爆弾が人々や環境にどんな被害を及ぼしたのかを知りたいと考えた。そして、今を生きる私たちがどのような想いを抱き、繋げていくべきなのかを、実際に被爆地を訪れて、自分の目と心で思案したい。このような想いから、今回の長崎派遣に参加することを決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 青少年ピースフォーラム

2日間にわたり開催された青少年ピースフォーラムでは、全国から集った学生と、長崎のピースボランティアの方々と共に、戦争についての学習や、意見の交換を行った。

1日目には平和会館にて戦争の疑似体験を行った。爆弾による人身被害を少しでも軽減するためにとる体勢を再現した。衝撃に耐えるため、手で目や耳を覆い、なるべく低く身を構えることを学んだ。この体勢は、幼いころから身を守る姿勢として刷り込まれたものだという。小さな子供でも、自分の身は自分で守らなくてはいけなかったのだ。

2日目には全国から集まった学生と、さまざまな観点で「違い」について話し合った。違い

があることで起こる楽しさや課題があることが分かった。色々な人の多様な考え方へ感化され、自分の考えをより深めることができた。

(2) 山王神社

山王神社には、原爆投下により被爆したが、その後、強い生命力を發揮し芽吹くことができた2本の被爆クスノキがそびえ立っていた。境内の入口にどっしりと根を張っており、大きな存在感があった。

被爆したとは思えないほど生き生きと生い茂っていたが、幹の内部には、被爆した際に飛ばされてきた瓦礫の一部が残っており、痛ましい過去を物語っていた。様々な惨状を乗り越えたクスノキの姿はまさに復興と生命力の象徴であり、長崎の人々の心の支えとなった。人々が代々守ってきたクスノキは、生命の結晶のようだった。青々と茂る葉が風で揺れ、天高くから暖かい光が注ぎ込む様は、人々を勇気づけそと見守っているようだった。

(3) 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

2日目の青少年ピースフォーラム、こじんまりフィールドワークにて追悼平和祈念館を訪れた。この祈念館は、原子爆弾の投下により亡くなった人々への追悼と、世界平和への祈りを捧げる場所である。

館内は水に関係する展示が多かったのが印象的だった。原爆が投下され何もかもが奪われた中、人々は水を求め彷徨った果てに亡くなった。その亡くなった人々に向け、哀悼の意を表し、水に関係する展示を多く行っているそうだ。

祈念館には、亡くなった人々に祈りを捧げる追悼室や、戦争時の手記、体験記が保管されている手記観覧室などがあった。館内の一角では、戦争で命を落とした人々の顔写真が次々と投影



<原爆投下の疑似体験>

されていた。写る人々の表情は皆笑顔で、こんなに大勢の命が奪われてしまったという悲しみが込み上げてきた。人々の戦争の記憶や、亡くなつた方への祈りを忘れてはいけないと痛感することができた。

3 心に残つたこと

青少年ピースフォーラム1日目、戦争の疑似体験に、実際の空襲警報のサイレンの音を聞いた。甲高いような、不安を煽るような音に虫酸が走った。私はサイレンの音に戦慄し、その場から逃げ出したくなつた。だが、当時の人々はこの状況から逃げたくても逃げられなかつたことを考えると、より一層胸が締め付けられた。戦時中はこの音がずっと鳴り響いていたなんて、怖くて仕方がなかつた。幼い子供にもこんな音が、四六時中耳に流れていたなんて、信じられなかつた。しかし、サイレンが鳴り響いている中でも、当時の人々は「生きる」ための選択をしなくてはならなかつたのだろう。

この音は、ずっと続くと思っていた平和な当たり前の日々が、戦争という脅威によって、次々と壊されていく合図だったのかもしれない。

4 派遣研修に参加して感じたこと

戦争で何十万人のかけがえのない命が奪われた。きっと、叶えたい夢があって、守りたいものがあって、もっと生きたかった人々の命だ。戦争は、そんな尊い命を一瞬で奪い去ってしまうものだと深く実感した。改めて、より多くの人に、自分自身の人生を歩んでほしいと思った。戦争は、絶対に起こしてはならない。

今後の課題は世界から核兵器を廃絶することだ。原爆資料館にて、戦争で使われる兵器が歴史を重ねるごとに改良され続けていることに慄然とした。大規模な被害を及ぼすために、殺傷能力の高い兵器が生み出され続けている。そんな中、今も戦争の記憶を語り継いでいる方々が何よりも危惧しているのは、「戦争があった過去が忘れ去られてしまう」ことだ。だからこそ、私たちは残酷な歴史を遡って、戦争を知らなければいけない。

戦争によって大勢の人が亡くなった過去は絶対に忘れてはいけない。そして、私たちが平和の意味を次の世代へ繋ぎ続けることが、被爆者の方から与えられた崇高な使命だと感じた。

平和のためにできること



郡山市立緑ヶ丘中学校2年 佐 藤 圭一郎

1 派遣研修への参加に当たって

私は80年前にあった戦争や、そのときに使われた爆弾、そして原爆のことなどについてすごくひどかったものくらいにしか思っていなかった。昔のことと思っていた。だが、最近ニュースでやっているロシアとウクライナの戦争でロシアが原爆を使えるのに一つも使わないことに気づき、その理由を考えた。その理由は、ロシアにも被害か何らかのデメリットがあるからだと考えた。ただ、そのデメリットが何かも分からぬ。そして、日本にどんな歴史があったのか、なぜ今日本は平和なのかなど分からぬことが多いあった。その「分からぬ」を「分かる」に変えるためにこの派遣研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

2日目に原爆資料館を訪れた。ここでは平和案内人の方に案内して頂いた。

原爆の種類、構造、さらには長崎に落とされた被害の大きさや範囲などに加えて、原爆投下までの戦争の歴史など、原爆について本当にたくさんことを学んだ。

中でも衝撃的だったのは、長崎と広島に投下された原爆を比べたら威力は長崎の方が上なのに死者は広島の方が上だったということだ。その理由は、長崎の落下場所は山に囲まれた場所で、被害が限定されたからである。

また、原爆の被害を受けた物が展示されており、その中の時計は原爆が炸裂した時間の11時2分で止まっていて本当に原爆が落ちたのだなど実感した。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは2日間にわたって

行われた。1日目の内容は、原爆の疑似体験とこぢんまりフィールドワークだった。

疑似体験では、自分の大事なものを書いた紙が戦争をイメージさせる大きな音や激しい光の映像を見る度に、段々なくなっていく、最終的にいくつの大物が残るのかというゲームで原爆の恐怖を体感することができた。また、こぢんまりフィールドワークでは原爆中心碑の付近を回り、原爆の説明をして頂いた。

2日目では、テーマ「違うってどういうこと？違うって悪いこと？」について意見交換した。自分の意見を初めて会う人と話すのは緊張したが、皆がしっかりと話を聞いてくれて楽しく話し合いができた。

その後、マレーシア元首相のマハティール・ビン・モハマド氏による第二次世界大戦や原爆についての特別公演を聴いた。当時の戦争の状況を聞いて、他国の方でも日本について詳しく話すことが出来るほど戦争とは悲惨なことであることが改めて分かった。

(3) 平和祈念式典

長崎に原爆が落とされた日である8月9日に行われた平和祈念式典に参列した。

そして、原爆が炸裂した11時2分に被爆者への思いを捧げ、黙とうをした。

私は、被爆者の方のお話と長崎市長の平和宣言が心に残った。



＜長崎の原爆の象徴＞

3 心に残ったこと

上の写真は長崎平和公園にある平和祈念像である。私はこここの像を最初に見たときになぜこのようなポーズをしているか疑問に思った。だが、平和案内人の方が、空に向かって手を伸ばしている右手は「原爆は空から落ちてきた」ことを意味していて、水平に伸びた左手は「平和や公平の『平』」を表現している。という説明をしてくださり、私は、原爆を忘れずに平和に生活してほしいという願いが込められているのではと考えた。続けて、平和案内人の方から「大きい男」の像である理由を説明して頂いた。その理由は、「強く、たくましい」という理由であり、これは第二次世界大戦で多くの国民が亡くなった日本に対し、それでも強く、たくましく復興してほしいという意味ではないかと考える。

原爆の象徴ともいえるこの像に込められた意味を皆が知り、過去の惨状を繰り返すことがないように願う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの派遣研修に参加して「戦争」や核兵器はそれほど遠くない存在であり、絶対に無くさないといけない物であるということが分かった。

この派遣研修に参加する前にあった「分からぬ」を「分かる」にすることができた。

被爆して今もなお、生きて話をしている被爆者の方を見て、「昔のこと」という考えが「つい最近のこと」であるという考え方へ変わった。

私はこの4日間で学ぶこと以外にも意見交換などの貴重な経験もできた。

そして、今、この瞬間も世界では戦争や紛争などで命を落とす人や、苦しい思いをしている人がいる。そんな人たちを救うために我々が出来ることは平和を訴え続けることだと私は思う。

戦争をなくせなくとも核兵器を使うことをなくすことは出来ると私は思う。つまりは、長崎を最後の被爆地にすることが課題である。

今回学んだことを身近な人から次の世代の人までいろいろな人に伝えていきたい。

平和な世界にするために



郡山市立富田中学校2年 上野茉那

1 派遣研修への参加に当たって

私が長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは以前行った原爆ドームだ。当時私は小学3年生で原子爆弾のことはあまり知らなかつた。広島平和記念資料館には被爆した三輪車や、家の一部、身に着けていた衣服などが展示されてた。当時の私にはとても悲惨な光景で最後まで見れなかつた。当たり前に過ごしていた日々が1発の原子爆弾で壊されてしまうなんてとてもおそろしい兵器だと思った。このようなことを二度と起こさないため、長崎を最後の被爆地にするために戦争の恐ろしさをみんなに伝えていきたいと思い、この派遣事業に参加することにした。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎平和公園

平和公園のシンボルといえば平和祈念像だ。これは、長崎県出身の彫刻家・北村西望さんが制作した高さ9.7m重さ30tの青銅製の彫像で、右手は天を指し、原爆の脅威を示しており、左手は水平に伸ばされ、平和を意味している。軽く閉じた瞼は犠牲者の冥福を祈る様子を表している。その他にも平和の泉がある。原爆のため体内まで焼けただれた被爆者たちは「水を、水を」と叫びながら亡くなつていった。その被爆者たちに水を捧げ冥福を祈り、世界恒久平和と核兵器廃絶を願い建設された円形の泉だ。被爆し水を求めてさまよつた少女の手記を刻んだ石碑が正面に設置されている。平和の象徴の鳩と鶴の羽根をイメージした噴水が舞い、平和祈念式典の前夜には数多くのろうそくが灯され、犠牲者を悼む催しがおこなわれる。

(2) 平和祈念式典

80年前の8月9日午前11時02分、一発の原子爆弾が長崎の地に炸裂した。私も実際に会場に行き黙とうを捧げた。

特に心に残つたことは合唱だ。今回の合唱曲は福山雅治さんが作詞作曲した「クスノキ」だつた。

小学生の合唱を聴いて心が震えた。

この曲は被爆クスノキがモデルになっており、「すべての生命が等しく生きられる世界」への願いや、「生命の尊さ、たくましさ、そして平和へのメッセージ」を表現している。この曲の中に原爆の凄まじい被害を受けながらも力強く再び芽吹いた生命力と、核兵器がもたらした破壊と戦争の愚かさを伝え、世界が平和でありますようにというメッセージが込められているのが伝わってきた。

地球を守る、人命・生物を守るためにも、核兵器はあってはならない。原爆の恐ろしさを語り継いでいくことが大切である。それが今現在、平和な世界で生きている私たちの使命だと思った。

(3) 平和祈念式典

8月9日、平和祈念式典が行われた。午前11時2分、長崎の鐘が鳴り響く中、黙とうを捧げた。この1分間はとても長く感じた。この1分間は、原爆によって亡くなつた方を追悼し、二度とこのようなことが繰り返し起こらないよう願いを込めた。



＜長崎の景色＞

3 心に残ったこと

心に残ったこと。それは長崎の景色だ。長崎では原爆が落とされた後の写真や、被爆した建物や植物の写真をたくさん見た。それを見たとき、ただただ人や動物の気配もなくその場所だけ時間が止まっているかのようだった。「70年は草木が生えないだろう」と言われていたのに、その2か月後には新たな芽を出し、そのことを知り勇気づけられた長崎の方々は、壊れた建物を片付け集めた木材で小屋を建て住み始めた。そして、色々な場所に草木を植え、80年たった今、美しい街並みが私の目の前に広がっていた。長崎の方々のこのままでは終われないという気持ちが強く、力を尽くした結果がこの景色だと思う。これこそが平和のしるし、象徴だと思った。これからもずっと守り続けていかなければならない景色そのものだ。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの4日間を通じて、研修前よりも原爆が恐ろしいものであり、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継いでいかなければならないと思った。研修では心が痛む写真をみたり、被爆された方の話を聴きながら怖いことや嫌なことから目を背けようとしていた。

しかし、原爆や戦争は私たちと同じ人間が作りあげてきたこと。それを元に戻すのの人間がしていかなければいけない現実である。今の平和は当時犠牲になった方々の尊い命の上に成り立っており、もう二度と繰り返してはいけない。戦争の悲惨さを忘れてはいけない。平和への想いを広げていかなければならない。そのことを受け継いでいくのは若い世代の私たちである。自分ひとりの力では微力だが語り続けることにより多くの方々にも伝わり、大きな力に変わり平和に過ごせる世界になることを願いたい。学校の代表として参加し、同世代の仲間と協力したり意見交換ができ、とても貴重な経験となった。自分自身の成長にもつながり、とても感謝している。

平和な世界を維持するためには



郡山市立大槻中学校2年 田 村 惺 那

1 派遣研修への参加に当たって

僕は、戦争のことを全く知らなかった。そんな僕が戦争について学ぼうと思ったのは、去年国語で読んだ「大人になれなかった弟たちに…」がきっかけである。自分のせいで幼い弟が亡くなつたという悲しい物語を読み、昔の日本には、こんな子どもがたくさんいたのかと深く考えさせられた。そこから戦争や原子爆弾のことを学ぶようになり、いつかは長崎と広島に行ってみたいと思っていた。その時にちょうどこの長崎派遣の機会があり、いい経験になるだろうと思い、参加を決断した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館・如己堂

永井隆博士は、長崎医科大学で放射線医学を専門とし、卒業後は、放射線医学の普及と発展のために日々研究や患者の診察を続けた。結核が流行し、技師として1日に100人以上をレントゲン撮影した影響で白血病にかかり、「あと3年の命」と宣告された。さらにその2ヶ月後、長崎に投下された原子爆弾によって被爆した。重傷を負い白血病も悪化した永井博士だが、寝たきりとなつても様々な訴えを本に書き残した。

永井隆記念館で特に印象に残つたのは、永井博士のたくさんのメッセージだ。中でも「原子爆弾は長崎でおしまい！長崎がピリオド！平和は長崎から！」というメッセージが一番印象に残り、被爆者をこれ以上出したくないという熱い想いがこめられていると感じた。

他にも実際に永井博士がインタビューをうけている映像や、永井博士の生涯が分かる展示パネルなど、永井博士のことを深く学べることが

できる。外には、浦上の人たちやカトリック信者たちが永井博士のために建てた「如己堂」がある。如己堂には、永井博士と2人の子どもが暮らしていた。聖書の言葉「己の如く隣人を愛せよ」という意味で名付けられた。亡くなるまでの3年間を如己堂で過ごし、17冊におよぶ本を書き上げ、世界の国々で読まれたものもあった。最後までたくさんの訴えをした永井博士に、僕は深く考えさせられた。

(2) 原爆資料館

原爆資料館には、被爆して形が変形したものや当時の写真が展示されていた。11時2分で止まった時計、爆風で崩れた浦上天主堂のレプリカ、長崎に落とされた「ファットマン」のレプリカなどを実際に見ることができ、当時の被爆地の状況や被爆者の方の写真を見て、とても心が痛んだ。

いま世界にある原子爆弾は、長崎に落とされた原子爆弾よりも何百倍から何千倍もの威力があるということを知った。原爆の怖さを目で見て実感し、やはり、原子爆弾は世界からなくさないといけないものだと改めて思った。

(3) 山王神社のクスノキ

事前学習会の時に学習した、山王神社のクスノキを実際に見たとき、写真で見たときよりも迫力があった。本当に被爆したクスノキかと疑うくらい枝葉が生い茂っており、幹の中にも爆風で飛んできた大きめの石が何個もあるのに立派に立っており、やはりこのクスノキは特別なクスノキなのだと改めて実感した。



＜後ろから見た平和祈念像＞

3 心に残ったこと

長崎派遣で一番印象に残ったことは、平和公園にある平和祈念像である。この写真は平和祈念像の後ろ姿である。この像は仏を表して作られ、ポーズにも一つひとつに意味がある。右手には「原爆の脅威」、左手には「平和」、右足には「原爆前の静けさ」、左足には「原爆に立ち上がるうとする気持ち」が表されている。そして、閉じている目には、「戦争で亡くなった人々の冥福を祈る姿」が表されている。平和祈念像が座っている台座の後ろには、このポーズの意味を説明したものが刻まれている。僕はこのような意味があると知ったときとても驚いた。今までには、ただのポーズだと思っていたもの一つひとつに作った人達の想いがこめられていることに僕は心惹かれた。

僕はこの像を自分の目で見ることができてとても良かったと思う。そして、この像は被爆して亡くなった人達の想いがこめられた大事な像なのだと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

僕は、この長崎派遣に参加して、原子爆弾の怖さや平和について深く知ることができた。たくさんの場所に行って学ぶことや、色々な人たちの話を聞くことで、インターネットだけでは、わからないことを現地に行って学ぶことができ、とてもいい経験になった。

この長崎派遣は、一生忘れるがない4日間だと思う。最初は緊張して上手く話せなかつた仲間も、協力し合い学ぶことで友達となり、友情関係を築く大切な時間にもなった。この長崎で学んだことを身の回りの人に伝え、「核兵器のない世界」を実現させるために、僕たちができる最大のことをしていきたい。この長崎では本当にたくさんのこと学んだとてもいい機会だった。

80年目の祈りとことば



郡山市立小原田中学校2年 前 原 虹

1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下された。町は一瞬で炎に包まれ、爆心地の温度は約3,000～4,000℃、きのこ雲は約14,000mの高さまで上がったと言われている。多くの命が奪われ、町の姿は一変した。今も世界では戦争が続いている。その現実を思うと、とても残酷で、どうしても納得できない。だからこそ、この派遣事業に参加し、戦争の悲しさや平和の大切さについてもっと深く学びたいと思った。そして、学んだことを自分の中にしっかりと残し、まわりの人にも伝えていきたい。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館には、被爆者の苦しみを伝える遺品や写真、大型資料が数多く展示されていた。自分が生まれる前の日本で、こんな悲しい出来事が本当にあったことを知り、強い衝撃を受けた。中でも印象に残ったのは、爆心地から約800mの民家で見つかった柱時計だった。原爆が炸裂した11時2分で針が止まっており、その瞬間の恐ろしさを物語っていた。展示を通して、戦争の悲惨さと平和の大切さを改めて感じた。

(2) 長崎原爆犠牲者慰靈平和祈念式典

8月9日に長崎原爆犠牲者慰靈平和祈念式典が行われた。今年で80年という節目に訪れることができて光栄だ。石破内閣総理大臣や海外からの来賓の方々がたくさん参列されていた。

11時2分に参列者全員で黙とうをした。その他に児童合唱や、被爆者代表、長崎市長の言葉があった。

児童合唱では長崎市出身の福山雅治さんが作

詞作曲したクスノキの合唱を聴いた。

被爆者代表の方の言葉で、当時の長崎市の情景をまるでその場にいるかのように想像できた。その想像はとても残酷なものであった。火傷か切り傷なのか分からない血まみれの男性。顔から血を流している赤ちゃんを抱いて歩く母親。腕が切れて垂れ下がっているのではないかと思われる人。軽傷で済んだ人や、地下工場で仕事をしていて無傷で帰れた人たちもいた。ところがそれらの幸運な人たちも、次第に歯茎から出血し、髪の毛が抜け落ちて次第に亡くなってしまった。

あなたも今想像しただろう。

「No more Hiroshima」「No more Nagasaki」

「No more War」「No more Hibakusha」

これは長崎市長の言葉だ。

力強い言葉に心を打たれた。

市長の言葉は間違いなく会場全体を圧倒しただろう。

(3) NHK長崎「クスノキ 2025」

その夜、NHK総合の音楽特番『MUSIC GIFT 2025～あなたに贈ろう希望の歌～』の生放送に参加した。会場は福山雅治さんの地元・ハピネスアリーナで、福山さん本人が登場し、全員で何度もリハーサルを行った。本番では「クスノキ」と「虹」をみんなで歌い、歌詞の一つ一つが心に響いた。自分の名前に「虹」が入っているので、曲名や歌詞に重なるようで嬉しかった。歌を通して平和の願いや命の大切さを感じることができた。この体験は、きっと一生忘れない思い出になると思う。



＜祈りの折り鶴と平和の願い＞

3 心に残ったこと

私は、2日間にわたって行われた青少年ピースフォーラムの活動が特に心に残っている。地元の高校生との交流に加え、広島県、岐阜県、沖縄県、東京都から参加した中学生とも話すことができた。お菓子を食べながら、それぞれの県の特徴やおすすめの場所、文化などについて語り合い、お互いの地域の良さを知ることができた。普段はなかなか話す機会のない人たちと交流できたことは、自分にとってとても貴重な経験だった。年齢や住んでいる場所が違っても、同じように平和について考え、話し合えることがうれしかった。このつながりを大切にしながら、これからも平和について考え続けていきたいと思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

この4日間の派遣を通して、戦争に対する考え方方が大きく変わった。行く前は「戦争はよくないこと」と頭では分かっていたが、どこか遠い世界の話のように感じていた。しかし、原爆資料館や式典などを通して、実際に起きた出来事や被爆者の苦しみを知り、戦争の悲惨さを強く実感した。家族や友人と過ごす日々がどれほど大で、平和がどれほど尊いものかを改めて感じた。この派遣事業をきっかけに、戦争は二度と起こしてはならないという思いを持つようになった。これからは、学んだことや感じたことを自分の中にしっかりと残し、次の世代にも伝えていきたいと思う。

未来につなぐ平和な世界へ



郡山市立宮城中学校2年 熊 田 蘭

1 派遣研修への参加に当たって

私がこの長崎派遣事業に参加したきっかけは、核兵器の廃絶を実現するための取り組みや戦争とは何かをより詳しく知るためにある。

たった一発の原爆で周りが焼け野原になり、家族を失った人がたくさんいた時代。

このような体験をする人を減らすためにどのようにしてその事実を伝えるか、また、この派遣事業に参加してたくさんの知識を得たいと思い、参加することに決めた。

2 派遣研修に参加して

(1) クスノキ

爆心地から800mほどしか離れていないところで被爆したクスノキ。70年は草木が生えないと言われてきたが、クスノキは奇跡的に再び芽吹き樹勢を回復し、今もそこに立っている。

絶望を感じている時、芽を出したことで被爆した方々の希望になったのではないかと思う。

実際に見たクスノキは写真とは別物で、本当に被爆していたのだろうか、と思うほど凛々しく、力強く立っていた姿に生命力を感じ、涙が出そうになった。

とても綺麗だった。今も木の中に飛んできた石が入っているが、それでも生き生きとしている事に驚いた。

周りの人にもこのクスノキが再び芽吹いたことで、どれだけ人々の希望になったのかを伝えたい。

(2) 長崎原爆資料館

資料館にはたくさんのものが展示されていた。「11時2分」を指して止まったままの柱時計や、長崎に落とされた「ファットマン」の模型があり、この二つが特に印象に残った。

あんなに大きい物が上空から降ってきて、熱風・放射線を浴びて、原爆から逃れても後遺症で苦しんでいる人がいたことを考えるとつらい気持ちになった。また、ガラスが服に刺さって貫通しているものや溶けてくついた6本の瓶など、絶対当時の人たちは痛かったであろうという痕跡が残っている。ここで見た事を決して忘れないようにしたい。

そして、現在の当たり前の生活が幸せだということを思って過ごしたい。

(3) グラバー園

旧グラバー住宅は、和洋折衷の様式が特徴で、内装には大きな窓やモダンな部屋・厨房などがあり、L字型バンガローというところが高く評価され、注目を集めている。

グラバー園の由来は、貿易商であるトマス・ブレーク・グラバーが長崎に建てた旧邸宅（旧グラバー住宅）にちなんでいる。このような異文化を取り込む長崎市民の気風が、戦後の長崎の復興にも寄与したであろう。

私は初めてあんなに大きくて綺麗な建物を見た。ここに来れてよかったです。



＜クスノキ＞

3 心に残ったこと

この写真は誰もが一度は見たり、聞いたりしたことがあるだろう。クスノキである。

爆心地から約 800m しか離れていないところで被爆し、大きな被害を受けた。

しかし、その後、奇跡的に再び芽吹き、樹勢を回復し、平和と再生の象徴として、今もなお、その場所に立っている。

クスノキの生命力に心が強く揺さぶられた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎の原爆でたくさんの人々が犠牲になったことや、そのことが被爆者の方の心の中にずっと残り続けている事を学ぶことができた。

事前に原爆について調べて、紙にまとめて読み返し、忘れないようになっていた。このように長崎原爆資料館で見たたくさんのものを、これからも学び続け、決して忘ることのないようにしていきたい。

この 4 日間で今まで知らなかった事をたくさん学ぶことができ、さらに知識を深めることができた。

平和の尊さ、命の尊さをもう一度見直してこれから的人生に役立てたい。

2度と繰り返さないために



郡山市立御館中学校2年 横田 夕乃帆

1 派遣研修への参加に当たって

私は長崎と広島に原爆が投下されたことをテレビや教科書などで目にしたことはあるが、詳しくは知らない。なぜ罪のない何万人もの人々が犠牲にならなければいけなかったのか、理解ができなかった。今でも、テレビで、ウクライナやパレスチナなどで紛争や戦争が行われ、空襲に怯え、食料不足に耐えながら生活している姿を見てすごく心が痛んだ。そのため、この研修で実際に被爆地を見て平和の尊さと大切さを知りたいと思い、この研修に参加することを決めた。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井博士は長崎医科大学で放射線医学研究をしており、原爆投下前から白血病を患っていた。余命3年と診断され、その2か月後に原爆投下により被爆した。原爆により妻が亡くなり、永井博士は、白血病と闘いながらも、原爆症の研究や被爆者の救護活動に尽力した。そして、2畳ほどの如己堂で寝たきりの生活を送る。そこで、17冊の本を書き、平和を訴えた。如己堂は「己の如く隣人を愛せよ」という意味で、キリスト教の教えからとったそうだ。平和への祈り、人間の尊さを感じられる場所だ。

永井博士は幼い2人の子供を残して、43歳という若さで亡くなった。永井博士の生涯を見たり聞いたりして、最後まで平和を願い続ける諦めない心と、原爆被害と向き合う永井博士の強さに感銘を受けた。

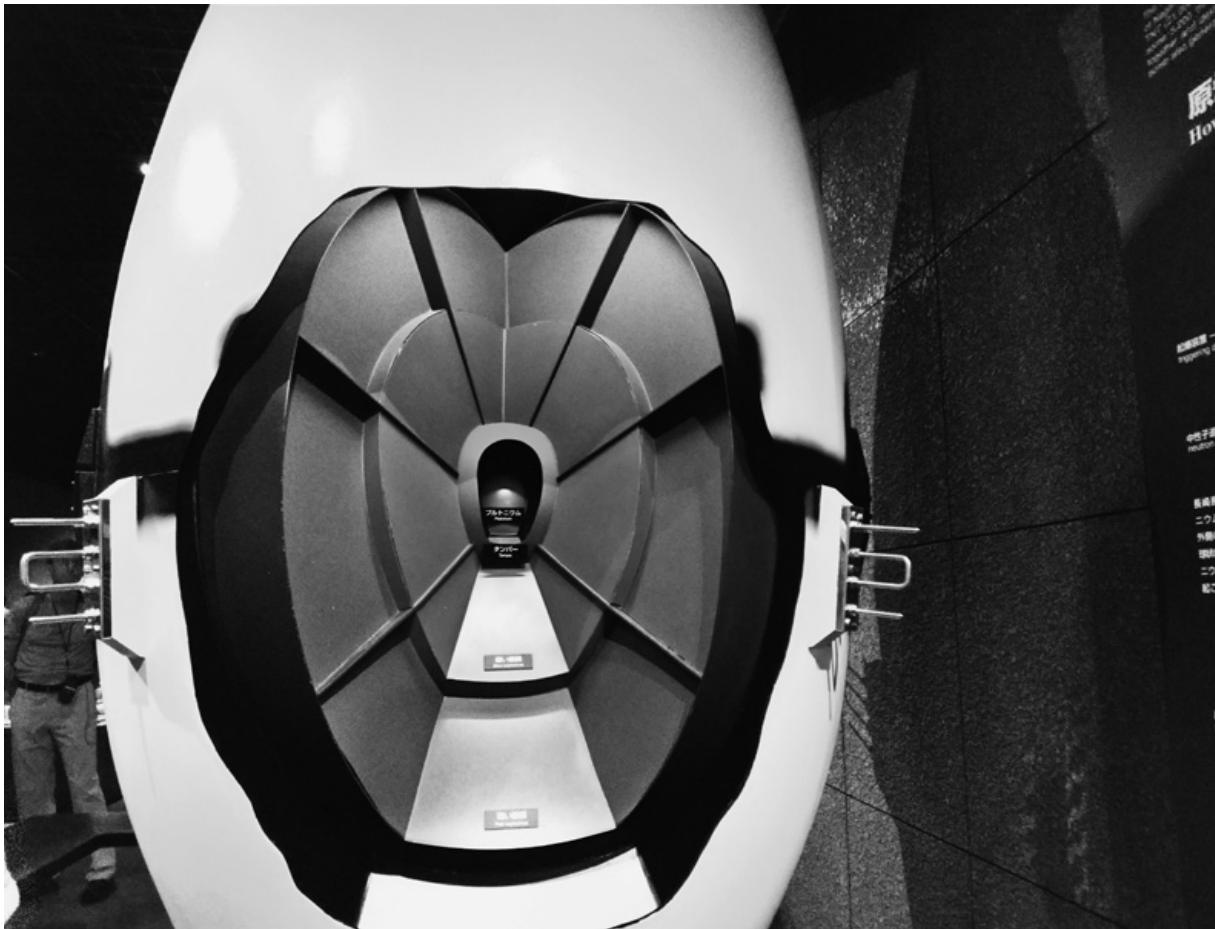
(2) 山王神社

山王神社では一本柱鳥居、クスノキを見た。事前学習で写真を見ていたが、実際に見てみると大きく、たくましく、そして鮮やかな緑葉を感じることができた。クスノキの中には爆風で飛んできた石がたくさん入っていて、原爆の恐ろしさを感じた。70年間草木が生えないと言われていたが、2か月後には新芽をだし、今でも生き続けている姿に感動した。

一本柱鳥居は、片足鳥居とも呼ばれている。半分が倒壊しても残り続けた。この柱が残ったことが当時の人々にとって、わずかな希望だったのではないかと思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

8月8日と9日に行われた青少年ピースフォーラムでは全国の学生、ピースボランティアの方々と交流をした。戦争の疑似体験を行い、恐ろしさや悲惨さを知ることができた。特に1日目の疑似体験が印象に残った。付箋に自分の大切な人・物・場所を書いた。お父さん、お母さん、お兄ちゃん、家、学校などを書いたあと、周りが暗くなり実際に空襲警報が鳴り響いた。目を覆い、耳をふさぎ、低い姿勢を取る。静かになると目を開け、火災などでなくなってしまうものを付箋に書いた人は、手放さなくてはいけない。このように、少しづつ自分の持っている付箋がなくなっていく。私は最後にはたくさんあった付箋が全てなくなってしまった。戦争というものは、大切なものをあっという間になくしてしまう、恐ろしいことなのだと体験できた。



＜最後に投下された原子爆弾のレプリカ＞

3 心に残ったこと

私が心に残ったことは、8月9日に長崎に投下された原子爆弾のレプリカだ。その容姿から英語で太った男を意味する、Fat Man にちなんで「ファットマン」と名付けられた。直径約1.52m、全長約3.25m、質量4.5tという、広島に落とされた「リトルボーイ」より大きく、強い力をもった爆弾だ。死者数約7万4,000人、負傷者約7万5,000人という、当時の人口の半数以上の人人が死傷した。爆心地周辺の地表面温度は3,000～4,000℃に達し、建物や人畜に致命的な影響を与えた。被害規模は爆心地から2キロ以内では家屋の約80%が倒壊し、広範囲で火災が発生した。太陽の温度は約6,000℃で、原子爆弾から高温の熱線が放出されたことがわかる。この熱線で多くの人が火傷で、肉が焼け、骨が丸見えになっている写真を見た。人の原型がなく、見たことのない姿に背筋が凍った。

このようなことが二度と起こらないでほしい、と思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

「戦争」。それは昔のこと。「平和」なのが当たり前。私はそんな風に思っていた。しかし、世界では今、この時も戦争をしている。被爆者の平均年齢は86歳を超えた。年々戦争の苦しみや恐ろしさを知っている人が減少している。世界の核兵器の数は増加しており、その威力は長崎、広島に投下されたものと比にならないほどだ。核兵器と人間は共存できない。原爆がある以上、いつか使ってしまう可能性があることを、頭の片隅に置いておかなければならぬのだと思った。私が学んできたことを、家族や友達に伝えていかなければいけない。今、空襲など考えず幸せに暮らせてること、平和の尊さ、戦争の恐ろしさをたくさんの人々に伝えたい。長崎を最後の被爆地に、そして、二度と同じことを繰り返さないために。私は平和を訴え続けたい。

平和の花の種を撒くために



郡山ザベリオ学園中学校2年 木 村 真 緒

1 派遣研修への参加に当たって

長崎派遣への参加のきっかけは、原爆で破壊された長崎の浦上天主堂の鐘がアメリカで復元制作が進んでいるというニュースを見たからだ。原爆投下から80年経った今でも遠い海外から被爆地、被爆者に寄せる想いがあるということを知った。考えてみると、私は原爆について授業で習ったことしか知らないと気がついた。そこで、実際に被爆地、長崎を訪れて、原爆が投下された当時のことを知りたいと思い、長崎派遣事業に参加することを決意した。研修を通して、当時のことを学び、また同世代の人たちが平和についてどう考えているのかを知りたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 浦上天主堂

浦上天主堂は爆心地から、約500mに位置している。原爆によって全壊し、多くの信者が犠牲になったそうだ。私が長崎派遣事業に参加するきっかけとなったアメリカで復元された鐘を見ることはできなかったが、たくさん印象に残っているものがある。中でも、落下してしまっていた鐘楼が印象に残っている。この鐘楼はとても大きく、鉄筋コンクリート製で約50tもあるそうだ。原爆爆発による約280mの爆風で飛ばされたようだ。これほど大きく、重いものが落下するほどの威力がある原爆は本当に恐ろしいと思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムで心に残っているのは、被爆体験講話だ。10歳の時に爆心地から約3.6kmのところで被爆した三瀬清一朗さんの講話を聞いた。原爆投下までの学校の授業、

原爆投下された時の感覚、その後の学校や食料の話、体験したことを細かいところまでお話をいただいた。どれだけ悲惨な状況であったかを想像するだけでとても悲しく、苦しい気持ちになった。

三瀬さんは平和とは当たり前の生活ができるこことだとおっしゃっていた。80年前は十分な食事がとれなかったり、原爆によって亡くなった友達がいたり、現在の私たちの生活では考えられないような日々が続いていたことを改めて知った。平和に過ごせている今に感謝しながら生活していきたいと思った。

(3) 山王神社

山王神社は爆心地から約800mに位置している。爆風によって柱が一本になっても倒れない一本柱鳥居や被爆によってボロボロになっても復活した被爆クスノキを見た。

驚いたことは、その鳥居に彫られていた寄進者の名前が消えてしまっていたことだ。元々は柱のすべての面に寄進者の名前が彫られていたという。しかし爆風や熱線によって、爆心地に近い面の名前が消えてしまっていた。文字が彫られていたのだろうというのは見て分かったが、文字は消えて、読めないほどになっていた。原爆がどれだけ強い威力だったのかを感じた。

私たちは事前学習会の中で、クスノキについて学んでいた。写真で見た被爆直後のクスノキは、枝葉が少なく、幹が折れて黒焦げになっていて、枯れ木同然の姿になっていた。原爆投下から2ヶ月、クスノキから芽が生えてきたという。今では緑豊かな大きなクスノキに育っているという写真も見た。しかし、実際に訪れて、クスノキを見てみると、見上げるほど大きく、被爆直後の様子から考えられないほどの葉が生



＜悲しい歴史を伝える平和の泉＞

い茂っていた。写真では感じられないような生命力を感じた。

そして、その後ハピネスアリーナでこのクスノキをテーマにした福山雅治さんの曲「クスノキ」を聞いた。実際に山王神社に訪れて、見たからこそ、歌詞にとても共感できた。また、被爆二世である福山さんが曲を通して平和のメッセージを伝える姿に感動した。

3 心に残ったこと

平和公園を訪れ、たくさんの施設を見学した。そこで特に心に残ったのは水に関する展示が多かったことだ。原爆によって体内まで焼けただれてしまった被爆者の方々は、「水を」「水を」とうめき叫びながら亡くなっていたといった。上の写真にある平和の泉に設置されていた、ある日のある少女の手記からの言葉を読んで、どれだけ水を求めていたのか、どんな水だったのか、当時の痛ましい光景を想像して、胸が締め付けられた。

平和の泉は、犠牲者の靈に水を捧げて冥福を祈るため、そして世界恒久平和と核兵器廃絶の願いを込めて、長崎の人々が中心となって、建設したそうだ。被爆者の方が水を求めて亡くなっていた悲しい歴史をずっと忘れないでいようとする長崎の人々の強い気持ちが伝わってきた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

実際に長崎を訪れることで初めて知ることがたくさんあった。そして、山王神社のクスノキのように、事前に調べて知っていたものでも、実際に見て、話を聞いて、初めて感じられること、知ることがたくさんあった。戦争や原爆について知った私は、これからはすべてのものを大切にしようと思うようになった。長崎を訪れたことによって、戦争の影響で今私が当たり前だと思っている生活をできていなかった人や原爆によって長く生きられなかった人がたくさんいたことを改めて知った。身近な食べ物やモノ、家族や友達など、私の人生に当たり前にあるもののすばらしさに気がつくことが出来た。

被爆体験の講話の中で三瀬さんは「私は被爆体験を話すことで平和の花の種を撒いている」とおっしゃっていた。被爆者の方々の高齢化が進んでいる中、私たちは被爆者の生の声を聞くことが出来た。実際に聞いたことを私たちが家族、友達、先生など身近な人に伝えることでその種を多くの人に撒いていけるようにしたいと思っている。平和の花の種をたくさんの人々に撒くことが出来れば、みんなが原爆について知ることができ、平和な世界に近づけると思う。

私が長崎派遣事業で学んだことをこれから、身近な人に伝えて、自分の周りから平和を作っていくたいと思う。

平和に向けて



郡山市立西田学園8年 村 上 正 悟

1 派遣研修への参加に当たって

近年、ロシアとウクライナの戦争によって核兵器が使われる危険性が高まっているとニュースで聞いた。長い戦争でたくさんの人の命が失われ、建物が壊された。それだけにとどまらず、核兵器まで使用されるなんて、どれだけの被害がでてしまうのだろう。80年前、長崎に原爆が落とされたことは知っていたが、授業やニュースで教えられたことしか知らなかった。実際にどのようなことが起こったのか分からなかった。その場所に行かなければわからないこと、知ることができないことなどがたくさんあると思い、長崎派遣事業に参加しようと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

祈念館は原爆で亡くなった人のご冥福を祈るために作られた。館内には、水が流れている所が7ヶ所あり、どの場所でも水の音が聞こえるように設計されている。それは水を求めて亡くなった人に水を捧げ、冥福を祈り、世界平和を祈念するという意味がある。地上部分にある1番大きな水盤は、夜になると約7万個の光が灯される。7万個というのは、原爆が投下された年に亡くなった方の数とおおよそ同じだそうで、追悼するために毎日明かりが灯されている。とても静かな祈りの場となっていて、平和の大切さをしみじみと肌で感じた。長崎原爆死没者だけでなく、戦争で亡くなった方々のご冥福と世界平和を祈り続けたい。

(2) 被爆体験講話

被爆当時10歳で伊良林国民学校5年生だった三瀬清一朗さんの講話を聴いて、その当時のことと詳しく知ることが出来た。三瀬さんは

爆心地から3.6kmの屋内で被爆されたそうだ。通っていた学校の体育館は地獄のようになり、校庭では亡くなった人を火葬していた。食料が足りず、友達と一緒に山に行き、木の実を採り、魚を釣って焼いて食べた。2学期になり会った友達との挨拶は「よう生きとったね」だった。小学生が久しぶりに会う友達に「よく生きていたね」と声をかけることなど、今の世の中ではあり得ない。生きてまた会えることは、今では当たり前のことだからだ。原爆で生き残れた人にも、下痢や嘔吐、頭痛がおそった。放射線の影響で後からがんや白血病になる人もいた。それだけでなく、偏見や差別にも苦しめられたそうだ。原爆は肉体的な影響だけでなく、精神的にも影響を与えてしまった。事実を正しく理解し、それを周りに伝えていくことが大切だ。そうすることで、間違った情報によってしいたげられる人を減らしていくことができるからだ。自分も常に正しい情報を見極められる人になりたい。

(3) 長崎原爆犠牲者慰靈平和祈念式典

平和祈念式典の中継を出島メッセ長崎で観た。式典が始まる前に献花をして、ハンドベルを聴いた。式典では、原爆犠牲者の慰靈のため献花や献水が行われた。11時2分には黙とうを行い、犠牲者の冥福と平和を祈った。その後、児童合唱で「クスノキ」が合唱された。式典には、たくさんの国や地域の代表が参加していた。また、プログラムも日本語だけでなく、英語でも書かれていて、戦争犠牲者の慰靈の気持ち、平和への祈りは、世界共通だと感じた。私は、式典を通して、自分の感じたことや考えたことを人に伝えることの大切さに気づいた。長崎に行って、平和の尊さや当たり前のありがたさを



<如己堂>

実感したので、その思いを周りの人にも伝えていきたい。

3 心に残ったこと

この写真は如己堂である。永井隆博士のためて建てられた2畳の建物だ。永井博士は原爆で、重傷を負ったが、無事だった仲間達と被爆者の救護活動を約2ヶ月間おこなった。持病の白血病が悪化して寝たきりになってからも、如己堂で「長崎の鐘」「この子を残して」など17冊の本を書き上げた。

私は永井博士の生き方に感銘を受けた。自分も被爆して、さらに病気もあり辛いのに、困っている人を助けることが出来てすごいと思う。本を残すことによって、後世にも原爆の悲惨さや、平和の大切さ、命の大切さを伝えている。私も永井博士のように「今」だけでなく「これからのこと」も「自分」だけでなく「まわりのこと」も考えて生きていきたいと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

この研修で、普段通り生活していると学べないことを多く学んだ。被害を受けた物を実際に見たことによって、原爆の威力の強さや恐ろしさを理解した。直接的な被害だけでなく偏見や差別という悲しい事実も知った。また、戦争の悲惨さを身近に感じた。原爆を二度と使って欲しくない。「長崎を最後の被爆地」にするためにたくさん的人が努力している。一人ひとりの力は微力だが、無力ではない。今回の研修で学んだことを、周囲の人に伝えていきたい。

私が今、できること



郡山市立湖南小中学校 8年 龜山愛心

1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日午前11時2分。1発の原爆弾が炸裂し、多くの尊い命が奪われた。このような悲惨な出来事があったのにもかかわらず、今もなおどこかで戦争や紛争が起きている。そして、大切な命が失われていくのが現実だ。

私は、戦争に関するニュースなどを見るたびにどうして戦争をしてしまうのか、平和な世界とは何か、と考えていた。そんなとき先生や先輩から長崎派遣についての話を聴いた。私は、戦争や平和について、自分の目で見て感じたことを自分の言葉で伝えたいと思い、長崎派遣の参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館で、最初に目に留まったものが11時2分で止まった時計だった。それは熱風で歪み、今にも壊れそうな時計。それを見たときに、本当にその間に原爆弾が炸裂したのだと実感した。その時のことを考えると、言葉も出ないくらい胸が締め付けられた。

展示物の中で心に残った写真がある。それは、アメリカ人カメラマン、ジョー・オダネルが長崎で撮影したという写真で「焼き場に立つ少年」というものであった。背中に亡くなった弟を背負っている。そして、列に並んでいる。並んでいる列というのは、火葬場に行く人々の列である。火葬場への長い道のりを並んでいる少年の思いを考えると、いたたまれない気持ちになつた。他の家族もいたであろうが、おそらく亡くなったのではないか。少年は前をしっかり向いて列に並び、これから家族の分まで生きようとする強い意志を瞳に宿している。この写真

はローマ法王が2019年に「戦争がもたらすもの」という言葉を添えて世界にひろめたものもある。

(2) 青少年ピースフォーラム

三瀬清一朗さんという、当時10歳で被爆地から3.6kmの屋内で被爆された方のお話を聴いた。家族8名は無事だったが、家の中は爆風で割れた窓ガラスや物等が散乱し、後片付けに追われたそうだ。数日後学校が気になり様子を見に行くと、想像を絶する現場が広がっていた。瀕死の人。大火傷で運ばれてくる人。「水を、水を」と叫び、苦しさのあまり、「殺してくれ、殺してくれ」と叫ぶ人。救護が間に合わず、次々と亡くなり、校庭で焼かれる様を嫌というほど見せられたそうだ。

三瀬さんは、「戦争は勝ち、負けもない。得られるのは悲しみだけだ。」と当時のことを振り返り、伝えてくださった。そして、その経験を通して、「平和は自分たちで築いていくものだ。」と、強く訴えておられた。

私はこのお話を聴いて、三瀬さんの経験は考えられないほど苦しいものだったのに違いないと感じた。今の生活ができるることは当たり前ではないことであり、人の命を大切にしていきたいと思った。そして、原爆弾の被害を周りの人に伝え、「平和を自分たちで築く」ことの大切さを同世代の人たちにも訴えたいと心に誓った。



＜平和のシンボル＞

3 心に残ったこと

4日間の研修で心に残ったことはたくさんあるが、最後に被爆クスノキを紹介したい。

山王神社にあるクスノキは、被爆してもなお成長し続けている天然記念物だ。クスノキが被爆した当時の写真を見みると、枝や葉が吹き飛ばされ、黒焦げの太い幹だけが残っていた。今も爆風で飛んできた石が幹の中にあることに、とても驚いた。クスノキを見た人々は、「もう枯れてしまった」と生きる希望を失いかけていたそうだ。

しかし、数ヶ月後、再び新芽が出てきた。その姿は、原子爆弾で被害に遭った人たちが復興に向かう勇気を与えてくれた。1本の木がたくさんの人の生きる希望となったということだ。

私は、クスノキを実際に見て、大きな生命力を感じた。原子爆弾の被害があっても成長し続けたクスノキは、再生を諦めない気持ちと強く生きることの大切さを表しているのではないだろうか。

被爆クスノキは長崎の平和のシンボルだ。この木が表す意味を理解し、誰かに伝えていかなくてはならない。そして、世界が平和になるためにも被爆クスノキを守っていきたい。

4 派遣研修に参加して感じたこと

被爆地である長崎へ行き、戦争の悲惨さや命の大切さを詳しく学ぶことができた。

被爆体験講話では、原子爆弾の恐ろしさを理解できた。私たちは今、自分の身の回りに戦争がなく、平和な日常を当たり前に過ごしている。

食べ物や服、家族、家があるということは、私たちにとって普通ということである。

しかし原子爆弾を使ってしまえば、当たり前の日常がすぐになくなってしまう。

戦争や原子爆弾による悲惨な出来事をもう起こさないためには、当たり前にある日常に感謝して一日一日を大切に生きていくことや、戦争や原子爆弾について正しく知ることなど、やらねばならないことがたくさんある。研修が終わった今、「自分にできることもある」と私の中に大きな使命感のようなものが生まれた。

まずは研修で学んできたことをしっかりとまとめて、周りの人たちに伝えていきたい。

世界が平和に近づくためにも、小さなことから少しづつ、自分の言葉で、この貴重な経験を多くの人に広めたい。これが、私が、今できることだ。

【表紙・裏表紙に掲載されている祈念碑等】



「平和祈念像」(平和公園)

郷土出身の彫刻家・北村西望氏の作で、昭和30年(1955年)に完成。像の高さ約9.7メートル、重さ約30トンの青銅製で、「右手は原爆を示し、左手は平和を、顔は戦争犠牲者の冥福を祈る」という作者の言葉が台座の裏に刻まれている。



「浦上天主堂遺壁」(爆心地公園)

爆心地から約500メートルの場所にあった教会「浦上天主堂」は、原爆による爆風で破壊された。この遺壁は、天主堂南側の壊れて残った壁の一部を移築したものである。



「折鶴の塔」(平和公園)

高さ3mほどの塔。平和祈念像の両側に建ち、平和の願いをこめて折られ届けられた折り鶴を安置している。

「平和の泉」(平和公園)

原爆のため体内まで焼けただれた被爆者は「水を」「水を」とうめき叫びながら亡くなった。

その痛ましい靈に水を捧げて、冥福を祈り、世界恒久平和を祈念するため昭和44年(1969年)に建設された。刻々と変化する水形は、平和の鳩の羽ばたきを形どり、鶴の港といわれる長崎港の鶴も象徴している。



「被爆クスノキ」(山王神社)

原爆被災に耐え、今なおたくましく生命力みなぎる大クスノキ。原子爆弾により、幹に亀裂があり枝葉も吹き飛び、熱線で焼かれ一時は枯死寸前となった。しかし、奇跡的に再び新芽を芽吹き、次第に樹勢を盛り返して蘇り、焼け野原から復興に向かう被爆者らを勇気づけた。平和や再生のシンボルとして親しまれ、現在では長崎市の天然記念物に指定されている。



「祈念館の追悼空間」(国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館)

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館は、原子爆弾の投下により亡くなられたすべての方々への追悼と平和祈念を行う場所である。

原爆死没者名簿登載者数 201,942名(令和7年8月9日現在)

— 戦後80年記念事業 —
令和7年度 郡山市中学生長崎派遣事業
「2025 ナガサキへのメッセージ」報告書

発 行 日 令和7(2025)年11月22日

発 行 者 郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会

(事務局:郡山市総務部総務法務課)

〒963-8601 郡山市朝日一丁目23番7号

電 話: 024-924-2031

F A X: 024-924-0956

E メール: soumuhoumu@city.koriyama.lg.jp

郡山市 ナガサキ

検索 

印刷製版 株式会社ヨシダコーポレーション

